大崎町教育委員会発掘調査報告書（12）
町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

栗之峰Ｂ遺跡・飯隈遺跡群・横瀬古墳

２０１９年３月

鹿児島県大崎町教育委員会

大崎町教育委員会発掘調査報告書（12）栗之峰Ｂ遺跡・飯隈遺跡群・横瀬古墳 2019年3月 鹿児島県大崎町教育委員会

横瀬古墳周濠出土遺物（埴輪片）

序　文

この報告書は，大崎町教育委員会が町内遺跡発掘調査等に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

横瀬古墳の周囲には，横瀬古墳以外にも墳丘が存在していたとの伝承があり，栗之峰Ｂ遺跡では古墳の有無を確認する発掘調査を行いました。墳丘の存在を確定する形跡は確認できなかったのですが，横瀬古墳築造時期以降の歴史の一旦が垣間見れたかと思います。

飯隈遺跡群の鷲塚地区では，山頂の３つの古墳をとりまく地下式横穴墓群のうち１基を発掘調査しました。古墳群の麓に位置する地下式横穴墓の発掘調査を行うのは初めての試みで，新たな飯隈遺跡群における墓制の様相を知りえる機会を得ました。

調査にあたっては，各関係機関，団体の皆様に多大なご支援とご指導を賜りました。

横瀬古墳周濠出土遺物の成果は，昭和 52・53 年度に鹿児島県教育委員会が実施した周濠確認調査で出土した遺物で，本年度譲渡申請を行い，再整理を実施しました。

大崎町における古墳時代について，まだまだ解明されない課題がありますが，今回の報告書は郷土の歴史を知る貴重な資料となりました。

ここに，調査担当者，指導者，作業協力者をはじめ，ご協力とご理解をいただいた地域住民の皆様に，心から感謝申し上げます。

平成 31 年３月

大崎町教育委員会

教育長　藤井　光興

報　告　書　抄　録

ふりがな	くりのみね
書名	栗之峰B遺跡
副書名	町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大崎町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	内村憲和　大野泰輔
編集機関	大崎町教育委員会
所在地	〒899-7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿1029番地　TEL099-476-1111
刊行年月日	2019年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積㎡	発掘調査原因
		市町村	遺跡番号					
栗之峰B遺跡	鹿児島県 曽於郡 大崎町 大字横瀬 小字栗之峰, 字田貫	464686	468-44	31° 24′ 59.8″	131° 01′ 07.0″	【確認調査】 20160829～ 20161226	105㎡	砂採取事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
栗之峰B遺跡	集落跡	中世 近世	溝跡１条	陶磁器片	中世の溝跡が検出される。

要　約	平成27年度に砂採取事業者から、栗之峰B遺跡内にある水稲栽培地において、砂を採取する事業を計画しているため、埋蔵文化財の有無について照合を行ってほしいとの依頼があった。依頼があった箇所は、太平洋戦争後に撮影された米軍の空中写真に、古墳らしき丘が写っていて、地元住民からも圃場整備以前には丘のようなものがあり，祠が鎮座されていたとの伝承が残っていた。 そのため、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターにご協力いただき、地中レーダー探査による古墳の周溝探査調査を実施した。探査調査の結果、古墳の周溝らしき反応が確認された。 平成28年度に，地中レーダー探査の結果をもとに計６箇所のトレンチを設け確認調査を実施した。

報　告　書　抄　録

ふりがな	いくま
書名	飯隈遺跡群
副書名	町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大崎町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	内村憲和　大野泰輔
編集機関	大崎町教育委員会
所在地	〒899-7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿1029番地　TEL099-476-1111
刊行年月日	2019年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積㎡	発掘調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯隈遺跡群（いくま）	鹿児島県（かごしま） 曽於郡（そお） 大崎町（おおさき） 大字神領（じんりょう） 小字飯隈（いくま）	464686	468-16	31° 26′ 30.5″	131° 26′ 32.9″	【本調査】 20171222～ 20180202	約10㎡	耕作地造成工事に伴う本調査

所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
飯隈遺跡群（いくま）	古墳	古墳時代	地下式横穴墓１基		

要　約	平成21年度に、大崎町農林振興課（以下「農林振興課」という。）から、畜産担い手育成再編総合整備事業及び畜産基盤再生総合整備事業に伴い、飯隈遺跡群内の山林造成計画について、埋蔵文化財の有無の照会があった。当該計画地は飯隈遺跡群内でも飯隈古墳群が立地している箇所であり、計画地となっている鷲塚山の山頂には３基の円墳（５号墳・８号墳・９号墳）が存在していることから、大崎町教育委員会、鹿児島県地域振興公社、農林振興課、畜産農家の内田氏と協議を行った。 協議の結果、計画地内に地下式横穴墓が存在しているのか、存在していた場合どの範囲まで分布しているのか、また地下式横穴墓が地表面からどの程度の深度で確認できるかを把握するため、確認調査を実施することとなった。 確認調査によって地下式横穴墓が存在することが判明し、確認された地下式横穴墓のうち17号地下式横穴墓が耕作地造成工事範囲に該当したため、本調査による記録保存作業を実施した。

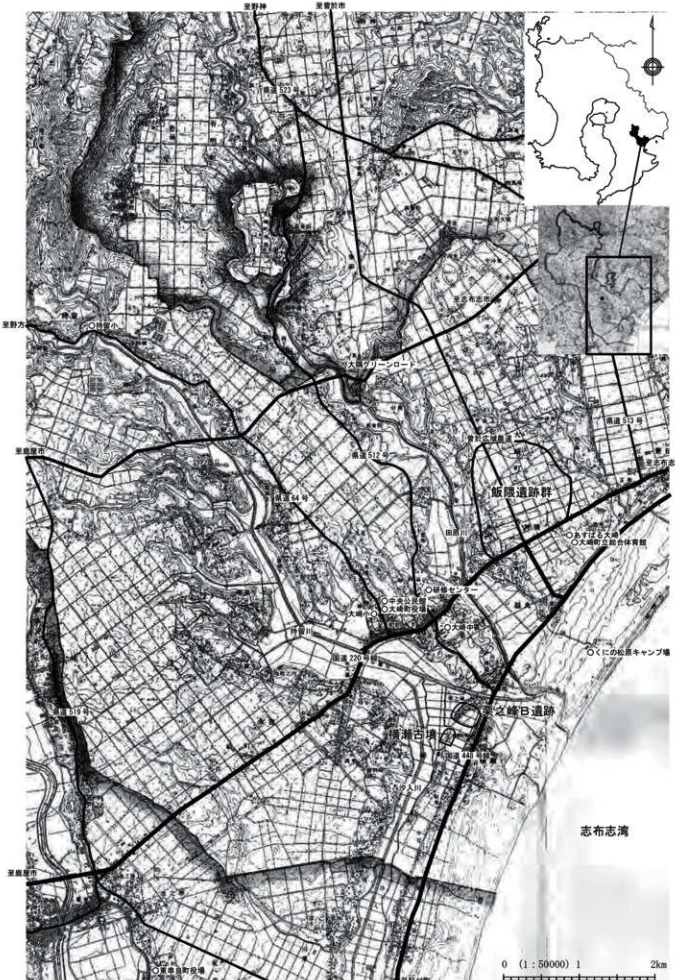
報 告 書 抄 録

ふりがな	よこせこふん
書名	横瀬古墳
副書名	町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大崎町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	内村憲和　大野泰輔
編集機関	大崎町教育委員会
所在地	〒899-7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿1029番地　TEL099-476-1111
刊行年月日	2019年3月

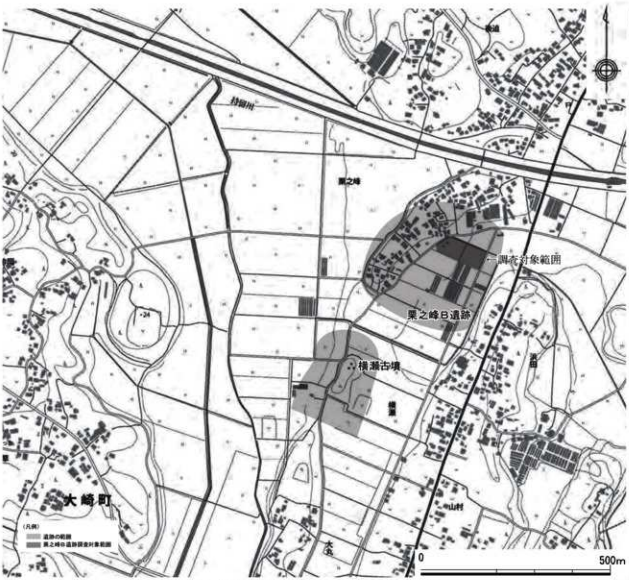
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積㎡	発掘調査原因
		市町村	遺跡番号					
横瀬古墳（よこせこふん）	鹿児島県（かごしま） 曽於郡（そお） 大崎町（おおさき） 大字横瀬（よこせ） 小字 大塚（おおつか） エサイ町（まち） 溝下（みぞした） 池田（いけだ）	464686	468-35	31° 24′ 48″	131° 0′ 54″	【再整理】 20180507～ 20181201		昭和52・53年度調査時に出土した遺物の再整理。

所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
横瀬古墳（よこせこふん）	古墳	古墳時代	古墳，周濠	埴輪片	昭和52・53年度調査時に出土した遺物。

要　約	2015年に刊行した横瀬古墳発掘調査報告書で報告したとおり、昭和52・53年度に鹿児島県教育委員会によって、横瀬古墳の周濠範囲を把握するため、確認調査が行われた。この確認調査によって多数の遺物が出土した。出土した遺物は調査後概要報告書として報告がなされたが、2015年に再実測等を行い再掲載した。ただし、過去の報告で掲載できなかった遺物も多く再見されたため、本年度再整理を実施し、本報告書にて掲載するに至った。



栗之峰B遺跡・飯隈遺跡群・横瀬古墳の位置図



栗之峰B遺跡及び横瀬古墳の調査対象地と周辺地形図

飯隈遺跡群の調査対象地と周辺地形図

例　　言

1．本書は，町内遺跡発掘調査等事業に伴う栗之峰B遺跡・飯隈遺跡群・横瀬古墳の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町神領及び横瀬に所在する。
3．発掘調査及び報告書作成については文化庁及び鹿児島県教育委員会から補助を受け，大崎町教育委員会が担当した。ただし，飯隈遺跡群鷲塚地区17号地下式横穴墓は町費で発掘調査を実施した。
4．発掘調査は，平成28年度栗之峰B遺跡・平成29年度飯隈遺跡群の確認調査を行い，整理作業・報告書作成は平成30年度に実施した。なお，栗之峰B遺跡発掘調査における地中レーダー探査においては，鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの協力を得た。また，栗之峰B遺跡発掘調査では，鹿児島県立埋蔵文化財センターの今村結記氏に協力を得た。
5．遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6．挿図の縮尺は，各図面に示した。
7．本書で用いたレベル数値及び座標は，世界公共座標と海抜絶対高を用いている。
8．発掘調査における基準点の座標及びKBMの測量について，栗之峰B遺跡では町道に設定されている基準点を用い，飯隈遺跡群では畜産基盤再編総合整備事業で設定されている基準点を使用した。
9．発掘調査における図面作成は，内村・大野・出原・清水・上档が行い，写真撮影は内村・大野が行った。
10．栗之峰B遺跡のトレンチ配置図作成は，株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に業務を委託し実施した。
11．遺物の実測図作成は，内村・出原・清水・上档が行い，遺構実測図のデジタルトレースは大野，遺物実測図のトレースは出原・清水・上档が実施した。遺構・遺物の実測図及びトレース図の添削は，内村が行った。
12．栗之峰B遺跡発掘調査における指導は，文化庁文化科学技官の森先一貴氏及び鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの中村直子氏の指導を得た。また，横瀬古墳周濠出土遺物の再整理作業については，鹿児島国際大学の大西智和氏の指導を得た。
13．遺物の写真撮影は，大野が行った。
14．本書の編集は下記のように分担し，内村・大野が担当した。

第1章	大野
第2章	内村
第3・4章	大野
第5章	内村・大野
第6章	内村・大野

15．栗之峰B遺跡の発掘調査において出土した遺物及び横瀬古墳周濠出土遺物については，大崎町教育委員会で保管し，展示・活用する。

本 文 目 次

巻頭図版
序文
報告書抄録
各遺跡の位置図
調査対象地の位置図と周辺地形図
例言
目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　発掘調査の経過と組織…… 1
第２章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　調査の方法…… 9
　第１節　発掘調査の方法…… 9
　第２節　整理・報告書作成作業の方法…… 9
第４章　範囲確認調査の概要…… 10
　第１節　京ノ峰遺跡確認調査の概要…… 10
　第２節　平良上Ｃ遺跡確認調査の概要…… 11
第５章　発掘調査の成果…… 12
　第１節　栗之峰Ｂ遺跡発掘調査の成果…… 12
　第２節　飯隈遺跡群発掘調査の成果…… 18
　第３節　横瀬古墳周濠出土遺物の成果…… 19
第６章　総括…… 28
　第１節　栗之峰Ｂ遺跡発掘調査のまとめ…… 28
　第２節　飯隈遺跡群発掘調査のまとめ…… 29
　第３節　横瀬古墳周濠出土遺物のまとめ…… 31
図版…… 33

挿 図 目 次

第１図　大崎町における地質図…… 7
第２図　各遺跡の位置と周辺遺跡…… 7
第３図　京ノ峰遺跡トレンチ配置図…… 10
第４図　京ノ峰遺跡調査範囲位置図…… 10
第５図　平良上Ｃ遺跡トレンチ配置図…… 11
第６図　平良上Ｃ遺跡調査範囲位置図…… 11
第７図　栗之峰Ｂ遺跡トレンチ配置図…… 13
第８図　栗之峰Ｂ遺跡１－３トレンチ土層断面図 … 14
第９図　栗之峰Ｂ遺跡４－６トレンチ土層断面図 … 15
第10図　栗之峰Ｂ遺跡４・５トレンチ拡大土層断面… 16
第11図　栗之峰Ｂ遺跡出土遺物…… 17
第12図　17号遺構実測図展開図 …… 18
第13図　S52・53年確認トレンチ配置図 …… 19
第14図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪口縁部…… 19
第15図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部①…… 20
第16図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部②…… 22
第17図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部③…… 23
第18図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部④…… 24
第19図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪底部①…… 24
第20図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪底部②…… 25
第21図　横瀬古墳周濠出土　器財・器種不明…… 25
第22図　昭和28年の栗之峰Ｂ遺跡周辺地形 …… 28
第23図　地下式横穴墓平面比較図…… 29
第24図　飯隈遺跡群鷲塚地区地下式横穴墓位置図 … 30
第25図　昭和52・53年度確認調査における須恵器等出土概要図…… 31

表 目 次

第１表　周辺遺跡地名表…… 8
第２表　栗之峰Ｂ遺跡遺物観察表…… 17
第３表　横瀬古墳周濠出土遺物観察表…… 26
第４表　飯隈遺跡群内鷲塚地区地下式横穴墓調査成果 … 29

図 版 目 次

図版１　栗之峰Ｂ遺跡…… 33
図版２　栗之峰Ｂ遺跡…… 34
図版３　栗之峰Ｂ遺跡…… 35
図版４　飯隈遺跡群17号地下式横穴墓 …… 36
図版５　横瀬古墳周濠出土遺物…… 37
図版６　横瀬古墳周濠出土遺物…… 38
図版７　横瀬古墳周濠出土遺物…… 39
図版８　横瀬古墳周濠出土遺物…… 40
図版９　横瀬古墳周濠出土遺物…… 41
図版10　横瀬古墳周濠出土遺物…… 42
図版11　横瀬古墳周濠出土遺物…… 43

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

（１）栗之峰Ｂ遺跡

平成 27 年度に砂採取事業者から，栗之峰Ｂ遺跡内にある水稲栽培地において，砂を採取する事業を計画しているため，埋蔵文化財の有無について照合を行ってほしいとの依頼があった。依頼があった箇所は，太平洋戦争後に撮影された米軍の空中写真に，古墳らしき丘が写っていて，地元住民からも圃場整備以前には丘のようなものがあり，祠が鎮座されていたとの伝承が残っていた。

そのため，鹿児島大学埋蔵文化財調査センターにご協力いただき，地中レーダー探査による古墳の周溝探査調査を実施した。探査調査の結果，古墳の周溝らしき反応が確認された。

平成 28 年度に，地中レーダー探査の結果をもとに計６箇所のトレンチを設け確認調査を実施した。

（２）飯隈遺跡群

平成 21 年度に，大崎町農林振興課（以下「農林振興課」という。）から，畜産担い手育成再編総合整備事業及び畜産基盤再生総合整備事業に伴い，飯隈遺跡群内の山林造成計画について，埋蔵文化財の有無の照会があった。当該計画地は飯隈遺跡群内でも飯隈古墳群が立地している箇所であり，計画地となっている鷲塚山の山頂には３基の円墳（５号墳・８号墳・９号墳）が存在していることから，大崎町教育委員会（以下「町教育委員会」という。），鹿児島県地域振興公社，農林振興課，畜産農家の内田氏と協議を行った。

協議の結果，計画地内に地下式横穴墓が存在しているのか，存在していた場合どの範囲まで分布しているのか，また地下式横穴墓が地表面からどの程度の深度で確認できるかを把握するため，確認調査を実施することとなった。

確認調査によって地下式横穴墓が存在することが判明し，確認された地下式横穴墓のうち 17 号地下式横穴墓が耕作地造成工事範囲に該当したため，本調査による記録保存作業を実施した。

（３）横瀬古墳周濠出土遺物

2015 年に刊行した横瀬古墳発掘調査報告書で報告したとおり，昭和 52・53 年に鹿児島県教育委員会によって，横瀬古墳の周濠範囲を把握するため，確認調査が行われた。この確認調査によって多数の遺物が出土した。出土した遺物は調査後概要報告書として報告がなされたが，2015 年に再実測等を行い再掲載した。ただし，過去の報告で掲載できなかった遺物も多く再見されたため，本年度再整理を実施し，本報告書にて掲載するに至った。

第２節　発掘調査の経過と組織

（１）平成 27 年度

栗之峰Ｂ遺跡において，埋蔵文化財の有無を確認するため，地中レーダー探査による調査を行った。

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井　光興
調査事務	町教育委員会社会教育課長	中村富士夫
	〃　課長補佐	谷迫　利弘
調査担当	〃　係長	内村　憲和
	〃　主事	大野　泰輔
調査支援	鹿児島県教育庁文化財課	黒川　忠広
調査指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 教授	中村　直子

（２）平成 28 年度

栗之峰Ｂ遺跡では，前年度の地中レーダー探査の調査成果をもとに，確認調査を実施した。

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井　光興
調査事務	町教育委員会社会教育課長	中村富士夫
	〃　課長補佐	谷迫　利弘
調査担当	〃　係長	内村　憲和
	〃　主事	大野　泰輔
調査支援	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員	今村　結記
調査指導	文化庁文化科学技官	森先　一貴
	鹿児島県教育庁文化財課	黒川　忠広
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 教授	中村　直子

（３）平成 29 年度

栗之峰Ｂ遺跡では，確認調査にて出土した遺物や写真，実測図の整理を行った。

飯隈遺跡群では，耕作地造成工事区域内において陥没の恐れがあった 17 号地下式横穴墓の発掘調査を実施した。

調査責任者	町教育委員会教育長	藤井　光興

調査事務　町教育委員会社会教育課長　中村富士夫
〃　課長補佐　谷迫　利弘
調査担当　〃　係長　内村　憲和
〃　主事　大野　泰輔
整理作業　〃　臨時職員
出原ふじ子・清水　優子・上档さつき
調査支援　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財研究員　今村　結記

（4）平成 30 年度

栗之峰Ｂ遺跡および飯隈遺跡群において，報告書作成に向けた，遺物実測トレース図作成・原稿執筆等を行った。横瀬古墳出土遺物においては，鹿児島国際大学大西智和教授より実測対象遺物の抽出作業の指導監督を得た。

調査責任者　町教育委員会教育長　藤井　光興
調査事務　町教育委員会社会教育課長　今吉　孝志
〃　課長補佐　谷迫　利弘
〃　課長補佐　鎌田　洋一
調査担当　〃　係長　内村　憲和
〃　主任　大野　泰輔
実測補助　〃　臨時職員
清水　優子・上档さつき

日誌抄

平成 27 年度　栗之峰Ｂ遺跡

日付	曜日	作業内容
3/23	水	地中レーダー探査を実施する範囲の刈払い作業を実施。
3/27	日	鹿児島大学理蔵文化財調査センターの協力のもと，地中レーダー探査による周濠探査調査を実施。

平成 28 年度　栗之峰Ｂ遺跡

日付	曜日	作業内容
8/29 ～ 30	月～火	トレンチの設置個所を確定し，重機による表土剥ぎ作業を行う。
9/1 ～ 29	木～木	トレンチ壁の土層観察を行うため，清掃作業を実施。清掃後，遺構の有無を確かめるため，サブトレンチを設定し掘削。遺構と認定した場合は，遺構の埋土を掘り下げ。なお，各作業工程ごとに写真撮影を実施。
9/9, 23	金・金	重機による追加表土作業を行う。
9/12 ～ 10/31	月～月	調査区周辺の現況測量を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託。現況測量と同日にトレンチ取り込み作業も行う。現地作業終了後，地形図及びトレンチ配置図を編集。
9/13	火	監督指導として文化庁森先技官に来跡していただく。森先技官及び鹿児島県教育庁文化財課黒川氏同席のもと，古墳の有無について現地協議。
9/23	金	鹿児島県立埋蔵文化財センター今村氏が調査支援。
9/28	水	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター中村直子氏より調査指導。
10/3	月	重機による埋め戻し作業を実施。

平成 29 年度　栗之峰Ｂ遺跡

日付	曜日	作業内容
7/1 ～ 9/30	土～土	遺構実測図整理作業を行う。
8/1 ～ 12/28	火～木	出土遺物の整理及び選別作業を行う。
1/4 ～ 2/28	木～水	報告書掲載用の地形図トレース作業を行う。

平成 29 年度　飯隈遺跡群

日付	曜日	作業内容
12/22	金	事業者・（公財）鹿児島県地域振興社・農林振興課・社会教育課の四者にて，発掘調査の方向性について協議する。協議の結果，地下式横穴墓を１基（17 号）発掘調査を行うこととなる。
1/31	水	重機による表土剥ぎを開始する。
2/1	木	竪穴検出及び掘り下げ作業を行う。
2/2	金	完掘状況の記録作業を行う。

平成 30 年度　横瀬古墳

日付	曜日	作業内容
5/7	月	横瀬古墳出土遺物（以下出土遺物）の譲渡申請について，県教育委員会文化財課，県埋蔵文化財センター，町教育委員会社会教育課と３者協議を行う。
8/13	月	鹿児島県立埋蔵文化財センターにて出土遺物の譲渡を行う。
8/14 ～ 9/4	火～火	遺物整理・洗浄・選別作業を行う。
9/5	水	鹿児島国際大学大西智和氏に実測対象遺物の抽出・実測方法について指導監督を受ける。
9/6 ～	木～	遺物実測を開始する。
11/1 ～	木～	遺物実測図のトレース作業を行う。
12/1 ～	土～	報告書掲載用の版組・台紙貼り付けを行う。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

大崎町は鹿児島の東部，大隅半島の南西部に位置し，総面積は100.82㎢，東西に約８km，南北に約18kmとなっている。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

北部を大鳥川が西から東へ流れ，曽於市大隅町，志布志市有明町で南流しながら菱田川として志布志湾に注いでいる。また，本町東部を田原川，中央部を持留川が南流し，これらも志布志湾に注いでいる。これらの河川によって本町の地勢は概ね２地区に分けられる。北端部は，菱田川の上流となる大鳥川を中心として，河川が溶結凝灰岩を切り開き，谷間の多い起伏の激しい渓谷を構成している。

本町の大部分はシラス土壌の上に形成された黒色火山灰土壌が広がる台地となっている。シラス台地の大部分は今から約29,000年前に姶良カルデラを起源とする破局噴火による入戸火砕流堆積物で構成されている。そのため本町は北部から南部の志布志湾に向けて緩やかな下り勾配となっている。しかし，本町においては北部の台地と中部以南の台地を分断するかのように丘陵地帯となっている。本町と志布志市有明町との境にある草野丘は代表的である。いずれの丘陵部も砂岩で構成されている。入戸火砕流の埋没を免れた山の頂部が丘陵地帯を形づくっている。

中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり，場所によって志布志湾まで見通せる。志布志湾に注ぐ河川によって台地は区切られ，本町西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中神）台地に分類される。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。入戸火砕流原を現在の河川の本流であった古肝属川，古菱田川により削剥，開析されて現在の地形の基礎が出来上がった。なお，本町飯隈台地東部に位置する菱田・中神地区及び志布志市有明町蓬原地区までは一段低い菱田原台地が広がっており，菱田川によって形成された河成段丘が形成されていたことを示す。同じく菱田川対岸の志布志市有明町野井倉地区でも同じような河成段丘が見られる。

縄文海進最盛期の頃まで志布志湾に突出していたシラス台地の先端部が約5,500年～5,000年前の離水時までに海の浸食を受け，海岸線に沿うように浸食を受けた。肝属郡東串良町～志布志市に至ってこの時に形成された海食崖を見ることができる。約5,700年～5,500年前には，串良川下流域に河川堆積による入塚砂州が形成され，砂州の背後は閉塞を受け，広大な湿地が現れ，後に泥炭層を形成することになる。約5,500年～4,500年前には横瀬砂州が形成され，同じく砂州の後背に湿地が形成された。永吉台地と仮宿台地間の低湿地には広域に泥炭層が厚く堆積しており，現在も非常に脆弱な地盤となっている。

横瀬砂州成立後も断続的に志布志湾岸に砂州が形成されていった。さらにそれぞれの砂州形成時期後間もなく海浜からの飛砂による砂の再堆積があり，砂丘を形成されていった。約1,700年前以降，砂丘が急速に発達し，志布志湾岸には大規模な砂丘帯が形成された。最も発達しているところでは，本町益丸で標高約27mの高さに及んでいる。

第２節　歴史的環境

大崎町における遺跡の分布は，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布している。現在も東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われており，次第に本町の歴史を知る上で重要な資料が得られつつある。

（１）旧石器時代

大崎町では旧石器時代の遺跡について記されている報告書として二子塚Ａ遺跡でフレークの出土が確認されている。東九州自動車道建設に伴う天神段遺跡の発掘調査で石器群が確認されている。

（２）縄文時代

過去に，野方地区山間部などで耕作地から出土した縄文時代後期の土器が採集されたものしか資料がなかったが，近年の発掘調査件数の増加に伴い，縄文時代の遺構・遺物が確認されるようになった。平成11年に県営中山間地域総合整備事業の農道整備に伴い発掘調査を行った立山Ｂ遺跡は，本町北部の山間部に立地する。遺構は確認されなかったものの，晩期の黒川式土器を中心として縄文時代の遺物が出土した。

平成11年に県道黒石串良線改良工事に伴う二子塚Ａ遺跡の発掘調査では吉田式，石坂式，桑ノ丸式など早期の土器が出土し，集石遺構も確認された。

大隅グリーンロード建設に伴い発掘調査を行った下

堀遺跡では前平式，石坂式，下剥峯式，手向山式，平栫式などの早期の土器が出土するとともに，13 基の集石遺構が発見された。また，遺構は確認されていないが指宿式を中心とする後期の土器も出土した。

下堀遺跡と同事業で発掘調査を行った細山田段遺跡では後期土器としての丸尾式，北久根式，西平式，御領式が，晩期では黒川式土器が出土し，それに伴う柱穴群と土坑 2 基が確認された。これまで本町の発掘調査で報告されている。東九州自動車道建設に伴う発掘調査では，天神段遺跡で縄文時代前期の曽畑式土器の時期に相当する石剣が出土した。他，中期の深浦式土器，晩期の入佐式土器などの遺物に伴い遺構が確認されている。また野方地区では天神段遺跡の他に，加治木堀遺跡，椿山遺跡，野方前段遺跡でも落とし穴などが確認されている。

永吉天神段遺跡でも早期の下剥峯式土器や押型文土器，前期では曽畑式土器，後期の岩崎下層系土器などが報告されている。また晩期の黒川式土器や刻目突帯文土器に伴い，竪穴住居跡 1 基が確認された。

（3）弥生時代

平成 11 年に民間の砂採に伴い調査を行った沢目遺跡は，本町南部志布志湾岸の「くにの松原」内に所在する。砂丘に埋没した集落遺跡である。出土遺物として入来Ⅰ・Ⅱ式から山ノ口Ⅰ・Ⅱ式の時期に相当する弥生時代中期のものと，中津野式の時期を中心とする弥生時代終末－古墳時代初頭の土器が出土している。その他軽石製の加工品や，鉄製品も確認された。

在地では見られない形式の土器も多く，山ノ口式土器と共伴して出土した須玖式土器や，布留式土器を模倣した土師器や，東九州地域から瀬戸内地域の影響を受けた土器も出土しており，広域的な交流の痕跡を窺わせる。

また，沢目遺跡は約 5,000 年前から 4,000 年前に形成された砂丘と古墳時代以降に形成された砂丘との間のクロスナ層を包含層としており，この 2 時期の砂丘の形成時期を示す手がかりとなった。

先述した下堀遺跡でも中期の遺構・遺物が確認された。山ノ口Ⅱ式を中心とする集落跡で，13 基の住居跡のほか，大型住居跡が 2 基発見された。また，5 基の土坑を伴う掘立柱建物跡が計画的な配列で出土している。

平成 19 年に調査を行った麦田下遺跡は，弥生時代後期初頭に位置付けられる在地系土器が発見された。高付式土器の初段階と考えられる。その他西南四国型土器がまとまって出土しており，西南四国との関連を裏付ける貴重な成果を得ている。また，下堀遺跡・麦田下遺跡の立地する仮宿台地の持留川を挟んだ対岸の永吉台地に立地する高久田Ａ遺跡では，平成 21 年度の調査で弥生時代後期～終末期に相当する集落跡が確認された。

永吉天神段遺跡では入来Ⅱ式土器，山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している。

本町北部では立山Ｂ遺跡で山ノ口式土器が出土している例がある。また，天神段遺跡では刻目突帯文土器や入来式土器が出土し，竪穴住居跡も検出された。椿山遺跡と野方前段遺跡では，吉ヶ崎式土器も出土している。分布調査，確認調査，工事立会でも弥生期の遺物が確認されていることから，北部台地及び山間部における弥生時代の集落が形成されている可能性は充分にある。

（4）古墳時代

本町の古墳時代の遺構として中心的存在であるのは，横瀬古墳である。横瀬砂州上の砂丘帯を利用して 5 世紀半ばに構築された九州でも有数の大型の前方後円墳で，昭和 18 年に国の指定史跡となった。

昭和 53 ～ 54 年に行われた鹿児島県教育委員会文化財課の範囲確認調査で墳丘を廻る周濠の存在が明らかとなっている。周濠幅は約 12 m～約 25 m と推定されている。平成 2 年に行われた鹿児島大学と琉球大学の墳丘測量調査によれば，墳長 132 m，前方部幅 72 m，前方部長 68 m，後円部径 64 m，くびれ部幅 48 m を測ると報告されている。

平成 22 年～ 23 年に町教育委員会が行った範囲確認調査では，これまで確認されていた周濠の北側と南側に外側にさらに廻らされている幅約 4 m の周濠の存在が明らかとなった。

平成 27 年 4 月 30 日の午前に肝付町～東串良町～大崎町を襲った線状降水帯による一時的な豪雨で横瀬古墳後円部東側の一部が剥落し，墳体が一部露呈する被害があった。この時，剥落部から円筒埴輪片が出土し，また露出した墳体面が湿地帯で採取したと想定される黒色土を基本として，黒色砂質層，褐色粘質層が所々に重なっている様相が確認できた。

鹿児島県教育委員会の範囲確認調査では周濠の埋土から大阪陶邑産の須恵器が出土している。また墳丘では円筒埴輪，形象埴輪片が採集されている。

明治35年に盗掘を受けている。盗掘者の証言により腐食した直刀や甲冑，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと記録されている。

仮宿台地南端部に位置する神領遺跡群には神領古墳群が立地する。前方後円墳4基（6号墳，10号墳，11号墳，13号墳。うち6号墳は宅地造成のため消失。11号墳は国鉄建設により半壊），円墳9基（1～5号墳，7～9号墳，12号墳。7号墳は平坦化。8・9号，12号については墳丘の形状が不明。）が存在する。また古墳群域には地下式横穴墓も点在し，過去に調査が行われたものだけで8基は確認されている。13号墳を除いて，ほとんどが田原川を臨む台地の縁辺部に点在する。

6号墳では彷製獣帯鏡が出土し，宅地造成に伴い河口貞徳氏らによって昭和43年になされた調査では，石棺は花崗岩製の板石6枚を組み合わせたものと言われている。また，地下式横穴墓では，鉄剣，イモガイ製貝輪，内向花文鏡が出土している。

平成18年～20年にかけて鹿児島大学総合研究博物館による神領10号墳の発掘調査が行われた。この調査で神領10号墳が全長約50mの前方後円墳であることが判明し，周濠に4基の地下式横穴墓が存在することが分かった。周濠から盾持人埴輪が発見された。またくびれ部では市場南組窯産の初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が出土した。

埋葬施設の調査では，入戸火砕流の溶結凝灰岩製の刳抜式舟形石棺が確認された。この石棺には6ヶ所の縄掛け突起があり，突起を含む最大長は277㎝，最大幅128㎝に及ぶ。石棺内は盗掘によりほとんどの副葬品は失われていたが，棺外に鉄剣，短甲の一部と，鉄鏃束などが発見された。これらの調査の成果から神領10号墳の築造時期は5世紀前半と推定されている。

同じ仮宿台地内の古墳群では，田中古墳群が存在する。3基の円墳が確認されているが，これについては未調査である。これらも田原川を臨む台地の縁辺部に立地している。仮宿台地内で確認されている古墳時代の墓域としては他に下堀遺跡がある。平成14年の大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査では，地下式横穴墓が7基確認されている。副葬品として鉄剣，異形鉄器，鉄鏃が出土し，墓周辺から大阪陶邑産の須恵器が確認された。

飯隈台地内には飯隈古墳群が存在する。神領古墳群とは異なり，台地の縁辺部ではなく，主に台地内部の小高い丘の頂部または微高地に点在するのが特徴である。1～3号墳は台地の平坦部もしくは微高地に立地する。4・5号と8・9号は『大崎名勝誌』で記すところの「鷲塚山」に立地する。鷲塚山とは，南北約500mにわたって延びる台地上の丘陵で，古墳はその尾根に点在する。また6・7号は鷲塚山より北西へ約400m離れた丘陵の頂上に立地する。

3号・4号・8号・9号は全壊もしくは半壊の状態である。8号は前方後円墳であったが，「戦時中に分かれ円墳化」と大崎町文化財要覧に記されているが，鷲塚山が半分造成をうけたため，8号墳の本来の姿をうかがい知ることはできない。

また永吉台地南端部の東串良町境近くには鷲塚地下式横穴墓が存在する。昭和59年に町道拡幅で発見され，河口貞徳氏によって調査された。

古墳時代の調査で集落跡の調査を行った例は多くないが，二子塚A遺跡では古墳時代の住居跡が確認されている。また，東九州自動車道建設に伴う発掘調査では，永吉天神段遺跡で，東原式土器，辻堂原土器，須恵器が出土した。

（5）古代

妻萬神社（現都萬神社）が古代日向国の5郡（臼杵郡，児湯郡，那珂郡，宮崎郡，諸県郡）ごとに設けられたことや，743年には聖武天皇によって勅願所とされたと伝えられている飯隈山三権現社が存在していたことなどから，古代期にも主要な地域であったと推測され，今後の調査成果が期待される。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で古代集落の様相を考える貴重な資料が発見されつつある。

天神段遺跡では，土師器や墨書土器，刻書土器，製塩土器などの遺物のほか，掘立柱建物跡や竪穴状遺構，土坑群などが見つかっている。他，北部では加治木堀遺跡，椿山遺跡，野方前段遺跡で古道や溝状遺構が確認されている。

また，麦田下遺跡では遺物だけであるが墨書土器2点が出土している。

（6）中世～近世

中世の山城として，神領遺跡群に所在する井出田城跡，龍相城跡，旧大崎城がある。文明13年（1488年）に，肝付木家を離反した肝付兼光によって龍相城から北側に中心を移し，大崎城（後に新に築城される大崎城に対して「旧大崎城」と呼ぶ。）を構えた。井出田城跡，龍相城跡の築造時期は不明であるが，鎌倉期に

構築されたものと推測されている。南北朝時代に能相城は，南朝方の楡井氏が拠った城で，後述する胡摩ヶ崎城の南方を固めていたと伝えられている。

肝付氏が島津氏に降伏した後の，天正５年（1576 年）大崎城は島津方の武将の支配を受けるが，翌年に現在の大崎小学校北側に拠点を移し，新に大崎城を築城した。ここは近世以降大崎郷の地頭仮屋となった。

仮宿台地の西側に南に突き出た舌状台地がある。この舌状台地の一部が胡摩ヶ崎城で，鎌倉期築城と推定している。南北朝時代には，楡井頼重が拠った城であり，頼重は北朝方の武将に攻め込まれ，この地で命を落としたと伝えられている。

胡摩ヶ崎城西方の持留川対岸にも，永吉台地から突き出た舌状台地があって，ここには野鄙城があった。現在は大半が現代のシラス採取で破壊されている。ここは胡摩ヶ崎城の西方を固める城であったと考えられる。本町の菱田地区にも菱田川を見下ろす台地の縁片部に立地する天守城は胡摩ヶ崎城の東方の防御を担っていたと考えられている。胡摩ヶ崎城の北方を固めていたと言われている天ヶ城は岡別府にあったと伝えられる。

永吉台地南部の横瀬古墳を臨む舌状台地は，椿谷城のあったと推定される場所である。荘園の弁済使であった肝付氏に対して，鎌倉期に新に配置された幕府の地頭 名越氏が築城した城と考えられている。

金丸城跡は田原川上流域の仮宿台地縁辺部，志布志市有明町嶺に立地する。志布志市有明町蓬原にある救仁郷氏の居城である蓬原城と関連していたと言われている城で，延文４年（1359 年）に蓬原城が島津氏久に攻められ落城した時に，この城も落城したと言われている。

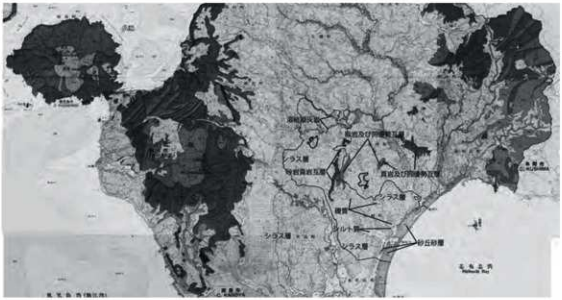
平成 12 年に大隅グリーンロード建設に伴う金丸城跡の調査が行われた。台地で環状に配列する掘立柱建物跡が確認された。遺物はいずれも近世の陶磁器類が出土したのみで，城の時期に相当する遺物が無かったため，掘立柱建物跡が城に関する施設かどうかは判断できなかった。その他，近世墓が出土している。

また，台地麓は田原川から小高い地形を呈しており，ここでは焼土を伴う土坑，貯水に用いられたと推測される土坑，多数の柱穴が出土した。焼土を伴う土坑は「カマド」に類する形状を呈している。この土坑が連なる場所の近くに軽石や破砕した土坑の炉部分の集積が認められ，その中に鉄滓や羽口が出土したことで，鉄製産関連の遺構も想定したが，焼土を伴う土坑そのものが鉄を扱っている痕跡は見つからなかった。

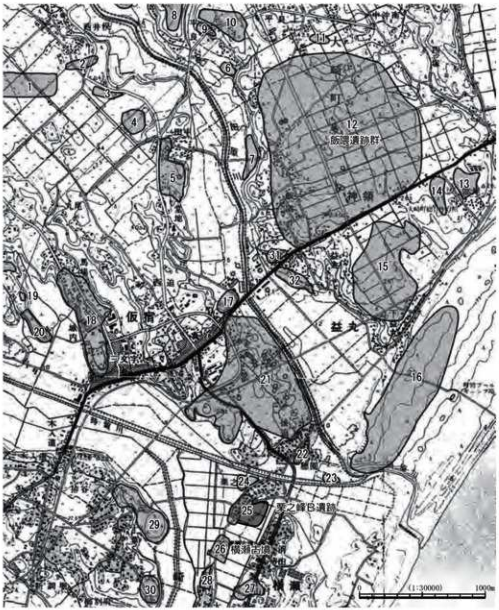
東九州自動車道建設に伴う発掘調査では，天神段遺跡で掘立柱建物跡や土坑，柱穴が多量に発見され，土坑墓からは青磁，白磁，青白磁，土師器，東播系須恵器，黒色土器，滑石製石鍋，鉄製品，鏡などがまとまって出土した。これらの出土品は平成 28 年に県の指定文化財となった。

（参考文献）

- 大崎町教育委員会（1989 年）『神領地下式横穴群５号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
- 大崎町教育委員会（1992）『神領地下式横穴群６号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
- 大崎町教育委員会（2001）『立山Ｂ遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会（2004）『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会（2005）『下堀遺跡　大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 大崎町教育委員会（2006）『美豆Ａ遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 大崎町教育委員会（2014）『麦田下遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 大崎町教育委員会（2015）『高久田Ａ遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 大崎町教育委員会（2016）『横瀬古墳』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（2003）『後迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（66）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（2004）『二子塚Ａ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（2010）『加治木堀遺跡・宮ノ木遺跡・植山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島大学総合研究博物館（2007）『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　No.15』
- 鹿児島大学総合研究博物館（2008）『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　No.19』
- 鹿児島大学総合研究博物館（2009）『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　No.22』
- 救仁郷断二（1951）『大崎町史』（株）べりかん社
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団立埋蔵文化財調査センター（2015）『天神段遺跡１　弥生時代～近世編』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団立埋蔵文化財調査センター（2016）『天神段遺跡２　縄文時代前期～晩期編』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（6）
- 永迫敏郎・奥野充・森脇広・新井房夫・中村俊介（1998 年）『肝属平野の形成史－テフラとＡＭＳ 14Ｃ年代による』
- 中村耕治他（1990）『大隅地方の古墳調査－墳丘測量を中心として（1）曽於郡大崎町　横瀬古墳』『鹿児島考古』第 23 号　鹿児島県考古学会



第１図　大崎町における地質図（鹿児島県地質図を改変）



第２図　各遺跡の位置と周辺遺跡

第１表　周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地		地形	主な時代	遺物・遺構	備考
1	堂園堀	井俣	堂園堀	台地	弥生・古墳		
2	宮脇	井俣	宮脇	台地	古墳・古代		
3	坂上	井俣	坂上	台地	弥生・古墳		
4	柿木	井俣	柿木	台地	弥生・古墳		
5	高尾B	神領	高尾	台地	古墳		H8 年農政分布調査。
6	平良宇都B	井俣	平良宇都	神積地	弥生（前・中）・古墳		H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い，確認調査。
7	別府下	益丸・神領	別府下・桶渡	神積地	古墳	土師器片	H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い，確認調査。
8	平良上A	井俣	平良上・平田	台地	縄文・古墳		
9	平良宇都A	井俣	平良宇都・平良上	神積地	古墳		H17 農政分布調査。H18 県営経営体事業に伴い，確認調査。
10	**平良上C**	**井俣**	**平良上**	**台地**	**弥生・古墳**	**集石遺構・住居跡等**	**H25 ～ 26 東九州自動車道建設に伴い発掘調査。 H28 変電所設置工事に伴い確認調査。**
11	牛ヶ迫	神領	牛ヶ迫・家戸原	台地	弥生・古墳		
12	**飯隈遺跡群**	**神領**		**台地**	**弥生・古墳・中世**	**飯隈古墳群 円墳９基（1 ～ 9 号 地下式横穴墓群 飯隈鷲塚地区 1 ～ 22 号地下式横穴墓群**	**１号一部宅地で削られる。3・4 号畑地造成で大半消失。5・8・9 号鷲塚山山頂にあり。8・9 号シラス採取で半壊。S37 耕地整理で 4 基調査。2 基舟形経石製組合せ式石棺，人骨，直刀，刀子出土。 H22・23 年鷲塚地区の確認調査（1 ～ 19 号）,H27. 20 ～ 22 号発掘調査。刀子・剣・人骨・貝釧出土。 H29 耕作地造成に工事に伴い 17 号発掘調査。**
13	高尾A	神領・差田	高尾・馬見岡	台地	縄文（後）		「資料科学研究所報告」49 号。H25 県営農総事業農道整備に伴い確認調査。遺構・遺物無し。
14	高尾B	神領	高尾	台地	古墳		H8 年農政分布調査。
15	大園・演牧・藤池	益丸・神領	大園・演牧・藤池	台地	弥生・古墳・平安	成川式土器・住居跡１	H25 県営畑総事業農道整備工事立会いで，住居跡１基調査。
16	沢目	益丸	松原	砂丘	縄文・弥生・古墳初頭	入来Ⅰ・Ⅱ式土器・山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器・中津野式土器・須玖式土器・集落跡	H11 砂採取事業に伴い発掘調査。
17	田原A	神領	田原	神積地	弥生（中・後）		
18	大崎城跡	仮宿	城内ほか	台地	中世末・近世		
19	美堂B	仮宿	胡摩	台地	古墳		
20	胡摩ヶ崎城跡	仮宿	古城	台地	中世（室町）		楡井氏の城
21	神領遺跡群	神領・横瀬		台地	弥・古墳・中世	神領古墳群 円墳９基（1 ～ 5, 7 ～ 9, 12 号）,前方後円墳４基（6・10・11・13 号） 地下式横穴墓群 井出田城跡 龍相城跡 旧大崎城跡	6 号は宅地造成で消失。10 号は H18 ～ 20 に鹿児島大学総合研究博物館発掘調査。11 号は国旗のために半壊。 これまでに 8 基調査。 文明初期肝付兼光築城。
22	後迫	横瀬	後迫	砂丘	縄文・弥吉・古墳・古代・中世・近世		
23	她園	横瀬	她園	神積地			旧「横瀬遺跡」
24	栗之峰A	横瀬	溝下	神積地	弥生（中）		旧「栗之峰遺跡」
25	**栗之峰B**	**横瀬**	**栗之峰・宇田貫**	**砂丘**	**古墳・中世・近世**	**陶磁器片**	**旧「横瀬遺跡」 H28 砂採取事業計画に伴い確認調査。**
26	**横瀬古墳**	**横瀬**	**エサイ町**	**砂丘**	**古墳**	**円筒埴輪・形象埴輪・大阪陶邑産須恵器など**	**S18 国指定。 S52・53 鹿児島県教育委員会開渡確認。 H22・23 大崎町教育委員会外濠確認。 H30 S52・53 調査時の出土遺物を譲渡申請。**
27	浜田	横瀬	浜田	砂丘	古墳		
28	大碌	横瀬	大丸	砂丘	弥生・歴史		
29	栫谷城跡	永吉	枝迫	台地・神積地	弥（中）・古墳・中世		鎌倉期に大隅守護代名越氏築城か？
30	**京ノ峰**	**永吉**	**京ノ峰**	**台地**	**縄文・弥生・古墳**	**山ノ口式土器**	**H14 町道拡張のため工事立会。旧「桜迫遺跡」 H28 オリーブ植樹事業に伴い確認調査。**
31	王子脇	益丸	王子脇・川路	台地	古墳		H18 農政分布調査。
32	田原B	益丸	川路	台地	古墳		

第３章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

（１）栗之峰Ｂ遺跡

鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの協力のもと，地中レーダー探査による古墳周濠範囲調査を実施した。調査の結果，周濠とおぼしきレーダー反応があった。そのため，６箇所のトレンチを設定し，確認調査を実施した。

確認調査の表土は重機による掘削を行ったが，遺構の様相を把握するため，トレンチの延長を実施した際は，表土から人力による掘削を行った。

本調査は遺構の有無を確認することを目的とし，一部遺構と思われる検出面が確認できた際は，埋土の掘り下げを行った。記録作業は，トレンチの壁面土層実測（縮尺 20 分の１）及び 35mm フィルムカメラ（リバーサル・モノクロ）を用いた。作業等の写真は，一眼レフデジタルカメラにて撮影した。

（２）飯隈遺跡群

平成 22・23 年度の確認調査によって確認された地下式横穴墓のうち，17 号地下式横穴墓（以下 17 号と記す）が，耕作地造成工事の範囲内に位置していたため，本調査による記録作業を実施した。

本調査にあたり，表土剥ぎは重機による掘削作業を行った。表土剥ぎ後は，竪坑検出を実施しセクションベルトを残しつつ竪坑埋土の掘り下げを行った。

竪坑掘り下げ後，玄室内に崩落していた土塊を除去した。また，人骨や鉄製品が出土する可能性があるため，より慎重に玄室内に流入した土を除去した。玄室内を完掘した後は，完掘状況の写真撮影を実施し，機材は，35mm フィルムカメラ（リバーサル・モノクロ）を用いた。作業等の写真は，一眼レフデジタルカメラにて撮影した。なお，実測図の縮尺は，土層断面実測図を縮尺 20 分の１・遺構の完掘状況を 10 分の１と設定し，実測作業を行った。

第２節　整理・報告書作成作業の方法

（１）洗浄・注記・接合

栗之峰Ｂ遺跡の遺物は，洗浄後遺跡名（「ＫＭＢ」），取り上げ番号を注記した。各出土した土層別に遺物を分類し，遺物の接合作業を行った。遺物の接合を行う際は，セメダインＣを用いた。

横瀬古墳周溝出土遺物は，鹿児島県教育委員会によって注記まで行われていたが，一部保管の際に付着した埃が付着していたものもみられたため，再洗浄を行った。接合については，新たに復元できる埴輪片が見つかったため，セメダインＣによる接合を行った。欠損部などの補強には，止水・修復用セメント「デンカキューテック」を用いた。また，実測対象遺物の選別については，鹿児島国際大学国際文化学部大西智和教授に指導を仰いだ。

（２）実測図作成・原稿及び図版作成

本報告書の遺物実測図は手実測にて行い，遺物トレースは実測原図を複写し，製図用ペンを用いてトレースした。遺構実測図は，実測原図をスキャンし，フォトショップにてサイズ補正を行った。サイズ補正後は，イラストレーターにてトレースし報告書掲載用の図版を作成した。原稿作成や版組は主にインデザインを用い，遺物トレース図のみ台紙に割付した。

栗之峰Ｂ遺跡発掘調査作業風景

遺物実測作業風景

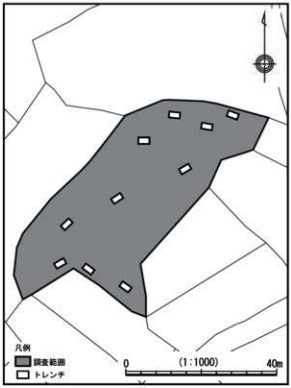
第４章　範囲確認調査の概要

第１節　京ノ峰遺跡確認調査の概要

京ノ峰遺跡内の山林において，山林開発者からオリーブを植樹する事業を計画しているため，埋蔵文化財包蔵地の有無を確認してほしいとの依頼があり，事業計画内において確認調査を実施した。

確認調査の方法は，事業計画内において，２×３m規格のトレンチを計10箇所設定し，重機による掘り下げを行った。なお，重機での掘り下げを行う際は，遺物の有無を確認するため，少しずつ掘り下げた。

遺構は検出されなかったが，１箇所のトレンチから遺物（弥生土器）が集中して出土した。今回の試掘調査対象範囲は，シラス台地の斜面地にあたり，遺構は確認されなかった。また，出土した遺物は台地の斜面から確認されたもので，おそらくシラス台地縁辺部に広がる居住域から斜面に廃棄された土器が出土したと思われる。



第３図　京ノ峰遺跡トレンチ配置図

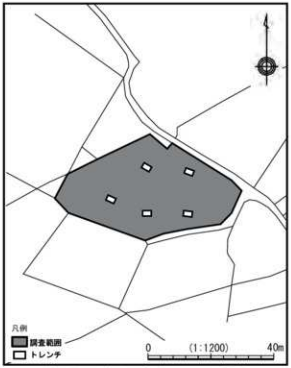
第４図　京ノ峰遺跡調査範囲位置図

第２節　平良上Ｃ遺跡確認調査の概要

平良上Ｃ遺跡内の休耕地において，電力設備業者より変電所の建設を計画しているため，埋蔵文化財包蔵地の有無を確認してほしいとの依頼があり，事業計画内において確認調査を実施した。

ただし，事業計画地近隣では，高速道路建設に伴う発掘調査が実施された。このことから，より慎重な確認調査が求められたため，重機だけでなく発掘作業員にも確認調査に従事していただいた。本確認調査では，変電所設置計画図をもとに，２×３ｍ規格のトレンチを計５箇所設定し，約２ｍ掘り下げた。表土や撹乱などの影響を受けていた層は重機で掘り下げ，遺物包含層の可能性がある土層は人力による掘り下げを行った。

確認調査を行った結果，想定以上に土地の改変が見受けられ，遺構・遺物ともに確認するに至らなかった。



第５図　平良上Ｃ遺跡トレンチ配置図

第６図　平良上Ｃ遺跡調査範囲位置図

第５章　発掘調査の成果

第１節　栗之峰Ｂ遺跡発掘調査の成果

（1）層序

栗之峰Ｂ遺跡における基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　水稲や畑地の表土。
Ⅱ層　褐灰色土。水稲栽培の床土。
Ⅲ層　黒褐色土。
Ⅳ層　暗赤褐色砂。
Ⅴ層　暗灰色土。
Ⅵ層　砂層。

（2）発掘調査の概要

平成27年度の鹿児島大学理蔵文化財調査センターによる地中レーダー探査結果をもとに，トレンチ箇所を設定し発掘調査を行った。トレンチの設定を行う際は，古墳の周濠を想定し，溝跡に対し直角かつ二重周濠の可能性も考慮しつつ設定した。また，トレンチの幅は1.5mとしたが，遺構の有無を確認する際に，遺構の判別が困難であった箇所は一部拡張を行った。
※太字の算用数字は，第11図の遺物番号にあたる。

（3）各トレンチの概要

１トレンチ

基本層序はⅠからⅢ層が堆積し最下層には砂層がみられた。Ⅲ層の下位には軽石の堆積がみられたものの，おそらく圃場整備時に堆積したものと考えられ，古墳に関連するものでないと判断した。また，最下層の砂層は土の交じりがなく，自然堆積と思われる。

２トレンチ

基本層序はⅠからⅣ層が堆積し，トレンチ西側には最下層である砂層を掘り込むような痕跡がみられた。トレンチ中央より東側に向かって基本層序とは別に計４層の土層が堆積していた。この東側の堆積は，砂層の直上にみられ凸凹している様相から，古墳に関連する堆積とみるには難しく，圃場整備で整地された層と考えられる。

３トレンチ

基本層序はⅠからⅢ層が堆積し，北側端部に遺構の可能性がある落ち込みがみられた。ただし，この落ち込みは圃場整備によって撹乱を受けていたため，計３層の堆積が薄く残存している様相であった。また，南側に短期間に使用されたと思われる細い溝も検出された。

４トレンチ

基本層序は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層が堆積し調査区東端に２条の溝跡が確認された。この２条の溝跡の埋没状況をみると，隣接しているものの同時期に造成された可能性は低く，東側から順々に造成された可能性が高い。特に東端の溝跡の埋土は１層しかないため，短時間に埋められたと思われる。また，砂層を掘り溝跡が形成されていた。

Ⅳ層から**１**が出土する。**１**は近世の陶器（薩摩焼）と思われ残存率が低いものの，掻き目が観察できることから器種は擂鉢と考えられる。釉薬は鉄釉で胎土は赤褐色を帯びる。

Ⅴ－３層から**２**が出土する。**２**は中国産の青磁碗と思われ，残存率は５分の１程度であった。胎土は灰色を帯びしまりが強い。文様はなく釉薬の表面に白い粒が観察される。

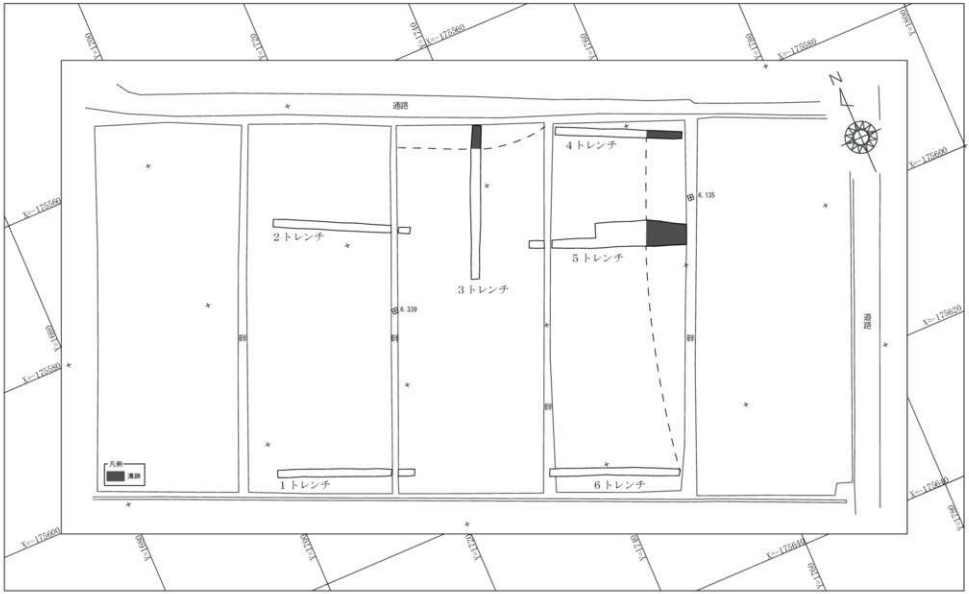
５トレンチ

基本層序はⅠからⅤ層が堆積し，各トレンチの中で５トレンチが明瞭に土層の観察を行うことができた。おそらく，旧地形が西から東に向かってやや傾斜していたため，土層が明瞭に観察することができたと考えられる。遺構については４トレンチと同様に，２条の溝跡を確認することができた。ただし，東端の溝跡は砂層の上に形成されておらず，黒褐色土を基本とする土層を掘り込んで造成されていた。また，埋没状況も４トレンチと違い，短時間で埋められた様相が無く砂と黒褐色土が互層しながら堆積していた。

なお，５トレンチについては，溝跡の全容を面的に確認するため，一部トレンチを拡張し，溝跡の検出を行った。拡張の結果，北東に向かって造成されたと考えられる。

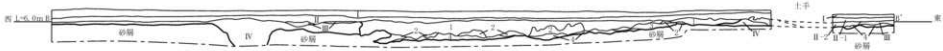
Ⅲ層から**３**が出土する。石材は頁岩で器種は砥石と思われる。厚みは6mmしかなく，両面だけでなく側面も使用痕が見受けられる。おそらく多面的に用いられたと考えられるが時期は不明である。

Ⅲ層から**４**が出土する。**４**は近世の陶器（薩摩焼）で器種は碗と思われ底部のみが残存する。底部の表には蛇の目釉はぎが施されている。また，高台の内面はやや斜めに削り出され，少し荒い調整で製作されている。釉薬は鉄釉で胎土は赤褐色を帯びる。



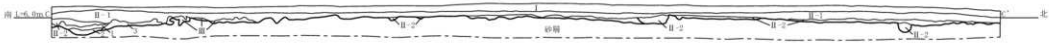
第７図　栗之峰Ｂ遺跡トレンチ配置図（1:500）

1トレンチ北壁土層断面図（S=1/80）



2トレンチ北壁土層断面図（S=1/80）

・整地層
1層：III層に起因する。鉄分の沈殿が酷似している。
2層：1層より色調がやや明るく鉄分の焼や崩赤褐色ブロックを多く含む。
3層：1層より色調が暗く粘質が強い。
4層：IV層に起因する。基本土質は砂で鉄分の塊を多く含む。

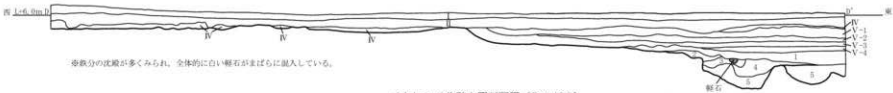


II－1層：II層同一。
II－2層：II層よりやや灰色が強く、鉄分・マンガンがまばらにみられる。
1層：2トレンチの1層に酷似している。
2層：2トレンチの4層に酷似している。

3トレンチ東壁土層断面図（S=1/80）

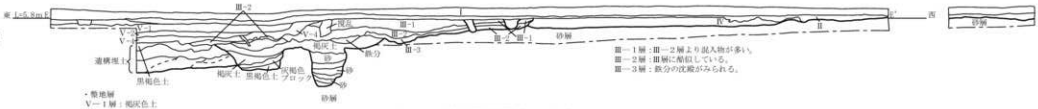
0 (1:80) 4.0m

第８図　栗之峰Ｂ遺跡１－３トレンチ土層断面図



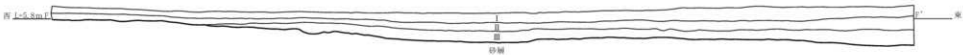
4トレンチ北壁土層断面図（S=1/80）

・遺構埋土
1層：暗褐色で粘性が強い。
2層：黄褐色ブロックを多く含む。
3層：白い砂ブロックを多く含む。
4層：褐灰色で鉄分が棒状に沈殿している。
5層：灰黄褐色で砂と灰褐色ブロックが多く混じる。



・整地層
Ⅴ－1層：褐灰色土
Ⅴ－2層：赤褐色土
Ⅴ－4層：褐灰色土

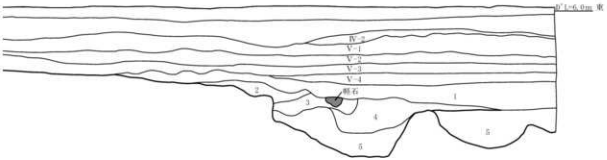
5トレンチ南壁土層断面図（S=1/80）



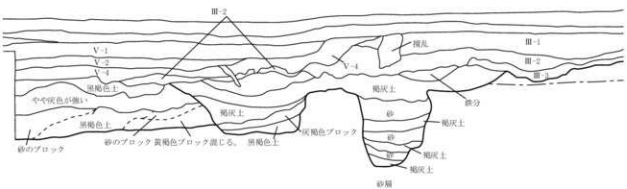
6トレンチ北壁土層断面図（S=1/80）

0　(1:80)　4.0m

第９図　栗之峰Ｂ遺跡４－６トレンチ土層断面図



4トレンチ北壁土層断面拡大図（S=1/40）



5トレンチ南壁土層断面図（S=1/40）

0 (1:40) 2.0m

第10図　栗之峰B遺跡4・5トレンチ拡大土層断面図

Ⅳ層から**5**が出土する。**5**は中世の青磁皿と思われ，底部の一部が残存する。胎土はややしまりが弱く白灰色を帯びる。釉薬は厚く貫入がみられる。

Ⅲ層から**7**が出土する。**7**は青花碗と思われ口縁部が一部残存する。**6**よりややくすんだ発色で口縁の縁に線描きが両面施されている。

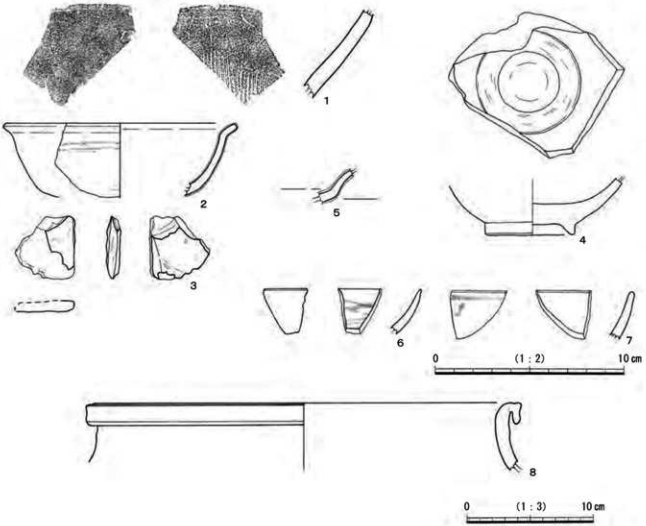
6トレンチ

基本層序はⅠからⅢ層が堆積し，Ⅲ層直下は砂層が検出された。土層全体の様相は西から東に向かって傾斜している状況ではあったが，遺構は確認されず地形の落ち込みによる堆積もみられなかった。

Ⅲ層から**6**が出土する。**6**は青花碗と思われ口縁部が一部残存する。表面に文様は確認できず，裏面に筆書きが施されている。

（4）表採遺物

8は表採遺物であるが，器種等の判別が可能で遺跡の性格を把握するため本報告書にて掲載する。**8**の器種は陶器の甕で口縁の一部が残存する。口縁は直角に折り曲げられて形成されている。表面には緑釉，裏面には鉄釉が掛けられており，胎土はやや焼き締めが弱く灰褐色を帯びる。



第 11 図　栗之峰Ｂ遺跡出土遺物

第２表　栗之峰Ｂ遺跡遺物観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土位置	種類	器種	器部			胎土	釉調	特徴
					部位	法量(cm)				
11	5	5区 Ⅳ層	皿	小皿	腰部	口径		灰白	オリーブ灰	
						底径	-			
						器高	-			
	2	4区 Ⅴ-3層	椀	中椀	口縁～腰部	口径	12.1	灰白	緑灰	無文（内外）
						底径	-			
						器高	-			
	6	6区 Ⅲ層	椀	小皿 丸形	口縁～腰部	口径	-			外器面 内器面　文様あり 15C 後半か？
						底径	-			
						器高	-			
	7	6区 Ⅲ層	椀	丸形	口縁～腰部	口径	-			外器面　口縁下圏線　部分文様あり 内器面　口縁下圏線 15C 後半か？
						底径	-			
						器高	-			
	1	4区 Ⅵ層	鉢	擂鉢	腰部	口径	-			
						底径	-			
						器高	-			
	8	表採	甕	大甕	口縁	口径	34.4	灰	灰オリーブ	常滑か？ 15C 代
						底径	-			
						器高	-			
	4	5区 Ⅲ層	椀	中椀	底部	口径	-	に赤い赤褐	鉄釉 褐灰	外器面：高台削り出し，内器面　見込み蛇の目 釉はぎ
						底径	4.7			
						器高	-			

挿図番号	レイアウト番号	出土位置	器種	法量(cm)		重量(g)	石材	備考
11	3	5区 Ⅲ層	砥石	長さ	2.7	7.8	頁岩	表裏側面に擦り面 破損品
				幅	3.1			
				厚さ	0.6			

第２節　飯隈遺跡群発掘調査の成果

（１）地下式横穴墓発掘調査の概要

平成22，23年度の確認調査によって発見された地下式横穴墓１基（17号），耕作地造成工事範囲内であり工事ないし耕作時に陥没する可能性があったため，記録保存による発掘調査を実施した。発掘調査の成果は以下のとおりである。

（２）17号地下式横穴墓（第12図）

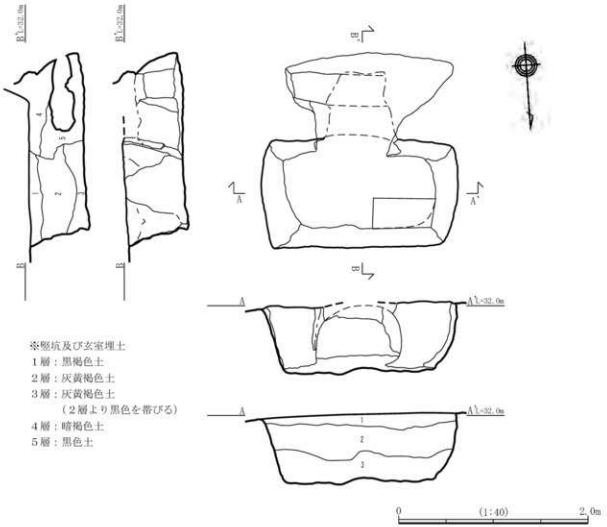
17号地下式横穴墓は，池田降下軽石層で検出され，全長は2.04mであった。竪坑の規格は，玄室に対して横軸2.07m×縦軸1.14mであった。また，竪坑の形状は玄室に対してやや長方形を呈する形であった。なお，竪坑の深さは，検出面から最深部まで0.73mである。

竪坑の埋土は，第12図のとおり計５層に分層される。１から３層は，竪穴の埋土と考えられるが，４層及び５層は羨門が陥没した際に堆積した土層と思われ，表土に酷似している。

羨門の閉塞状況について，羨門が陥没している状況であったことから，明瞭に観察はできなかった。ただし，陥没後玄室内に流入した土層をみるに，土塊ブロックや礫がみられないことから，おそらく板閉塞であったと思われる。また，追葬の痕跡は確認することができなかった。

玄室構造は，平入りである。玄門からの奥行が0.62mで，玄室の最大幅は1.73mとなり，天井高は0.44mを有する。羨門は床面幅0.73mで天井高は陥没していたため不明である。玄室天井の形状は，扁平状を呈し羨道は約45cmで，玄門から玄室にいたる通路は確認できず，玄門からすぐに玄室が造成されていた。

遺構の残存状況は，羨門から玄室右側天井にかけて陥没していた。工具痕は全体的に観察することができず，風化している状況であった。竪坑は，従来飯隈遺跡群で確認されている地下式横穴墓の竪坑より浅く，おそらく圃場整備の影響を受けて消失したものと考えられる。なお，人骨や副葬品は，ともに確認するに至らなかった。



※竪坑及び玄室埋土
１層：黒褐色土
２層：灰黄褐色土
３層：灰黄褐色土
（２層より黒色を帯びる）
４層：暗褐色土
５層：黒色土

第12図　17号遺構実測図展開図

第３節　横瀬古墳周濠出土遺物の成果

（１）横瀬古墳周濠出土遺物報告に至る経緯

大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）『横瀬古墳』（大崎町教育委員会 2016）の中で，昭和 52, 53 年に鹿児島県教育委員会が行った横瀬古墳内濠の確認調査出土遺物について報告した。ただし，これらは『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』（鹿児島県教育委員会 1984）で報告されている出土遺物のうち，須恵器を再実測・再トレースし掲載したものである。

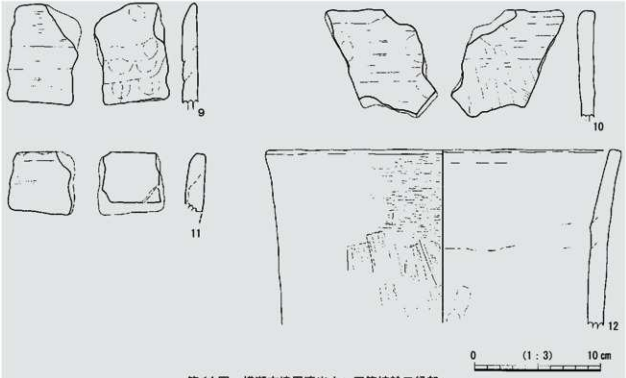
平成 30 年８月 13 日に，大崎町は鹿児島県が所蔵していた横瀬古墳出土遺物及び図面，写真の譲渡を受けた。今回，譲渡された出土遺物を精査し，過去の報告書等で掲載されていないものを中心に選定をし，報告する。

出土遺物の大部分は円筒埴輪の一部と思われる。その中で，胴部については突帯が残っている部分を抽出し，異なる断面形状のものをそれぞれ選定した。また文様が施されているものも選定した。円筒埴輪ではなく，器財埴輪の一部と思われるものや，あるいは円筒埴輪と判断しがたい遺物も選定した。

なお，譲渡された横瀬古墳の遺物はトレンチ出土のものとして整理されている遺物と，出土位置が明記されていない一括遺物があった。トレンチ出土遺物は，墳丘西側に設定されたトレンチ（４～８T）で出土したもので，多くは埴輪の小片がほとんどである。『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』（鹿児島県教育委員会 1984）で報告されているものが，概ね主要な遺物と言えるだろう。

第 13 図　S52・53 年確認トレンチ配置図
※黒塗りは H22・23 の確認トレンチ

今回の報告する遺物は，特にトレンチ出土遺物と一括遺物とでは分類せず，埴輪の種類と部位で分類して報告するものとする。



第 14 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪口縁部

（2） 出土遺物の概要

円筒埴輪

①口縁部（第 14 図 9～12）

9～12 は口縁部である。9～11 は垂直に立ち上がる。9 の口縁端部内器面は外側に向けて外反するため，口縁端部は細く窄まる。外器面は横方向にナデ調整される。内器面は粘土紐の接合部が明瞭に残っている。それぞれの粘土紐上部には，接合前に指オサエで調整をしたと思われる指頭圧痕が顕著に残る。

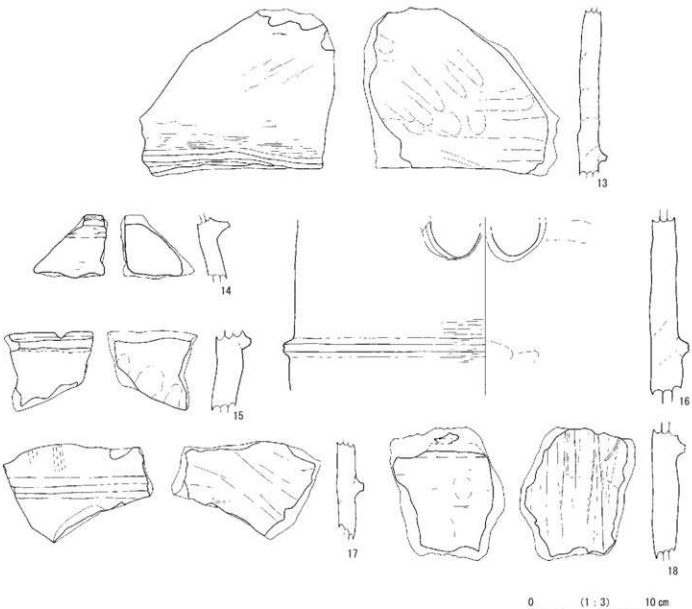
10, 11 の口唇部は平坦に整形されている。口唇部の内器面側を丸く整形し，一方外器面と口唇部面は直角になるように整形している。10 は口縁端部は肥厚する。内器面は縦方向の板状工具によるナデ調整を施した後，横方向のナデ調整を行っている。

11 は内器面に粘土紐の接合痕跡が確認できる。これは上に重ねた粘土紐の接合線ではなく，粘土紐を横に接合して輪を形成した時に生じた接合部と推測する。

12 は口縁部から胴部にかけて残存する。胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。口唇部は平坦に整形される。胴部外器面には縦方向のヘラ状工具によるナデ調整がされている。

②胴部（第 15 図 13～18, 第 16 図 19～24, 第 17 図 25～30, 第 18 図 31・32）

13～24 は突帯のある胴部を掲載している。13～18 は断面台形を呈している。13 の内器面に粘土紐の接合部が残る。指ナデによる調整がされている。14 の突帯は大きく外側に突き出している。



第 15 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部①

16は上部に円形のスカシ孔が確認される。17の内器面は斜め方向の板状工具によるナデ調整が施されている。18の突帯表面は欠損しており，不明瞭であるが残存する器面から断面台形であると想定される。内器面は幅２cm程度の板状工具でナデ調整を重ねている。

19は13～18と比較して突帯は低く扁平である。また，内器面は斜め方向の板状工具によるナデ調整がされている。20の突帯の端部はナデ調整により凹んでおり，断面形状はM字形になっている。突帯の断面を観察すると，薄い粘土帯を重ねて突帯を形成していると判断できる。20の下部には円形のスカシ孔の一部が確認できる。内器面は指オサエ，ナデによる調整がされている。粘土紐の接合線が残る。

21の突帯は粘土帯を貼り付けた後，粘土帯の上部は横ナデによって，突帯を接着させているが，下部は接着させておらず，本体部との間に僅かな隙間が残る。内器面は指オサエとナデによって仕上げている。

22～24は断面三角形の突帯を有する。22の突帯の上面と下面は横ナデによってわずかな稜線が生じる。内器面は縦方向のナデ調整がされているが，粘土紐の接合部が残る。23の突帯文上部は縦方向のハケメ調整後にナデ調整を行っている。僅かにハケメ調整痕が残る。下部にスカシ孔の一部がある。24は突帯を貼り付けた後，突帯端部を指で摘むように整え，その後に突帯の上下面の付け根部分を横ナデによって調整している。突帯の下部は板状工具によるナデ調整がされている。内器面は指オサエ，指ナデによって調整されているが，粘土紐の接合部が残る。

25～30は文様を伴う円筒埴輪である。25は部分的に摩耗しており，不明瞭な部分もある。縦線と横線を組み合わせたハシゴ状の文様である。残存する埴輪片では，上部４本の横線を描き，その後３本の縦線を施し，その後に下２本の横線を描いている。内器面は斜め方向の板状工具によるナデ調整がなされ，粘土紐接合部は指頭圧痕が残る。

26は刻線による綾杉文が施される。縦線を先に描き，その後斜め線・横線を描いている。文様は突帯より上部に施されている。突帯は扁平な断面コの字形である。

27の上方に２条の刻線による山形文が施され，その下には２条の孤状の文様が配される。孤状の文様の内側には直交する細い刻線が施される。28は山形文らしき文様の一部が確認できる。小片のため器種は不明である。

29は２箇所に刻線文様が施される。上部が尖っている葉形状を呈する。30は２箇所に突帯が確認される。上の突帯は断面台形を呈する。この突帯の下方には斜めの直線文が連続的に描かれる。下の突帯は断面三角形を呈する。この突帯直下に横方向の直線を描き，その後に斜めの直線文を連続的に施す。最後に斜めの直線文の上から，緩やかな波形の横線を描いている。突帯間には円形のスカシ孔の一部が２箇所確認される。このスカシ孔の間に菱形状の文様が施される。先述した29の葉形状文様は柳葉鐵，30の菱形状文様は圭頭鐵を模していると推測される。

31は，外器面に板状工具によるナデ調整がされているが，縦方向のハケメ調整痕が微かに残る。内器面には横方向に著しい指頭圧痕が残る。粘土紐の接合部と推測される。32は，突帯が接合部で剥落し，接着面が露になっている胴部である。接着面には浅い凹線が確認される。突帯を貼り付ける前に胴部に施した割り付け痕と推測される。外器面は横方向のナデ，内器面はヘラ状工具による横方向のナデ調整がなされる。

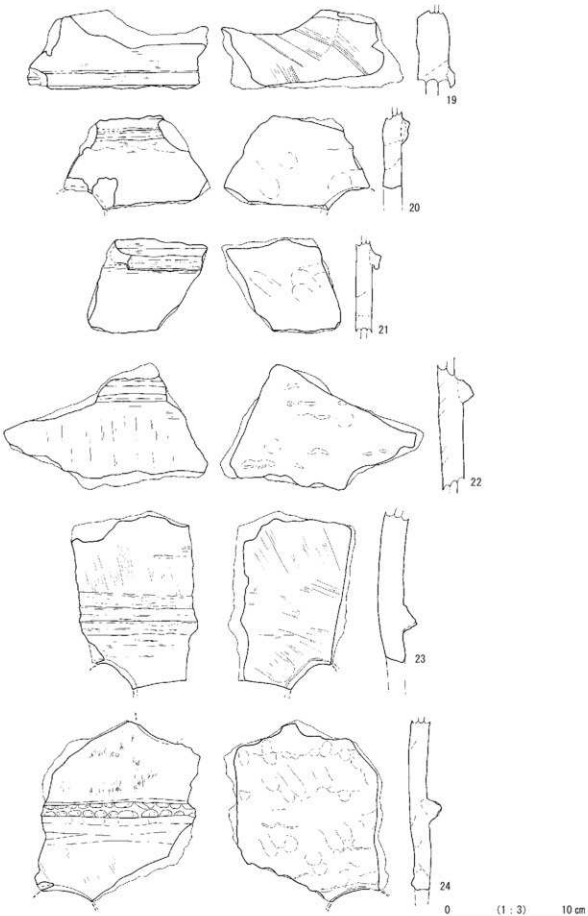
③底部（第19図33・34，第20図35～38）

33～38は底部及び底部を含む部位である。33・34の底面は胴部の器厚と比較して幅広く作られており，底面は内器面側に突き出すような断面形状を呈している。

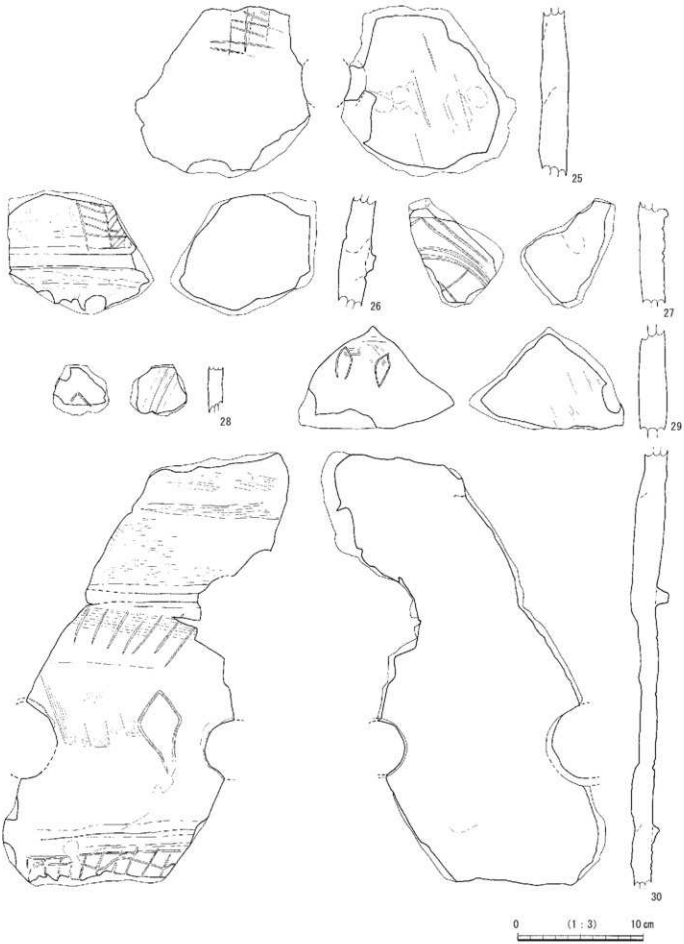
33は胴部に扁平な断面コの字形の突帯が貼り付けてある。また，突帯上方に円形のスカシ孔の一部が確認できる。内器面はヘラ状工具によるナデ調整がされている。34の底面には横に貼り合わせた土台となる粘土板の接合痕が残る。内器面は強く押し当てた工具の痕が斜め方向に残る。

35は胴部から底部までほぼ同じ器厚である。外器面は縦方向の板状工具ナデ，内器面は底部は指オサエ，胴部は縦方向の板状工具ナデで調整を行っている。35・36は底面に横に貼り合わせた土台となる粘土板の接合痕が残る。37の内器面に指頭圧痕が残る。

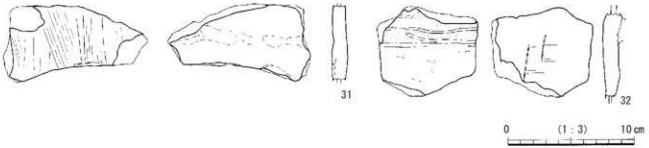
38の底部は底面が狭く不安定である。38は外器面にヘラ描きによる菱形文が確認できる。底部は指頭圧痕が残る。底面がきれいにナデ調整されているため，底部としているが，胴部の接合部がきれいに剥離した可能性もある。



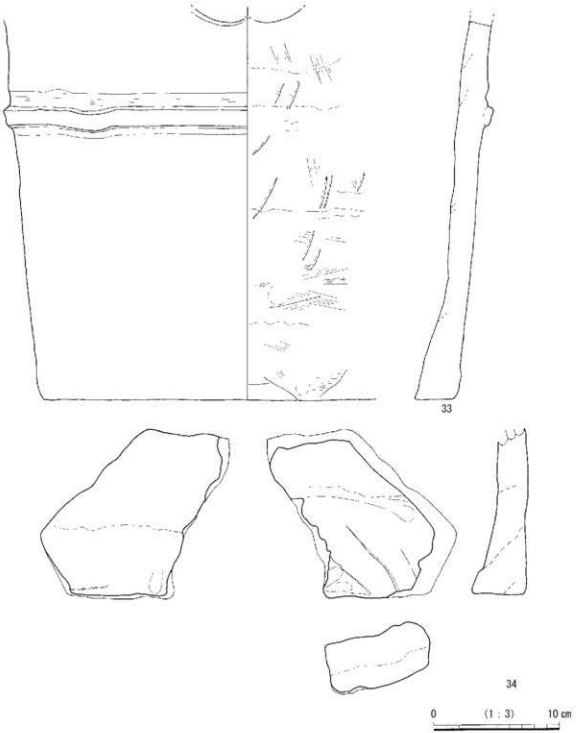
第 16 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部②



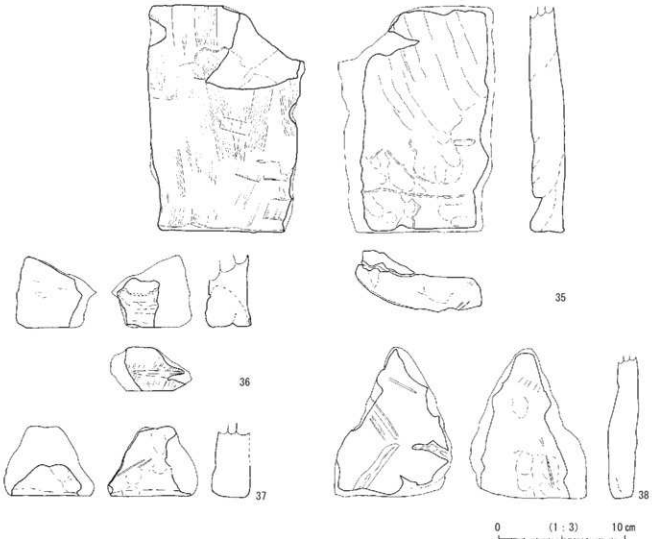
第17図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部③



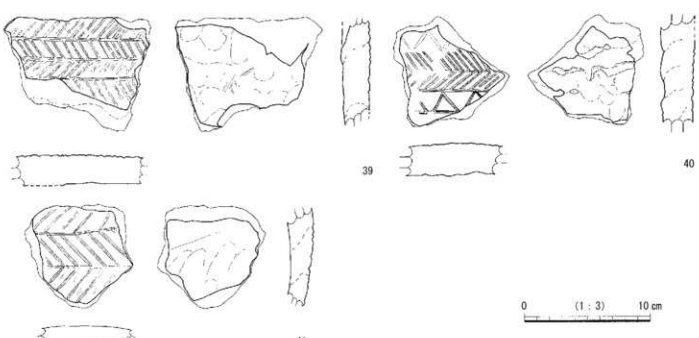
第 18 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪胴部④



第 19 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪底部①



第 20 図　横瀬古墳周濠出土　円筒埴輪底部②



第 21 図　横瀬古墳周濠出土　器財・器種不明

器財埴輪・器種不明（第 21 図 39 ～ 41）

39・40 は板状の形状を呈し，器財埴輪の一部と考えられる。**39** は綾杉文が施されている。外器面は 1 mm 大の小さな凹みが密集しており，ヘラ描きの切り合いは判別できない。この小さな凹みは器表面の劣化と考えられるが，不明である。なお，内器面は小さな凹みはない。**40** は横方向に直線を配し，その後斜めの線を入れることで綾杉文と鋸歯文を施す。**39・40** ともに内器面には粘土紐の接合部が確認され，特に **40** は顕著である。

41 は上下，左右に緩やかに内湾しており，円筒埴輪の一部ではなく，形象埴輪の一部と判断したが，器種の詳細は不明である。従って上下左右関係は正確なところは不明である。ヘラ描きによる綾杉文が施されている。横に直線文を施した後に斜め線を施している。

第 3 表　横瀬古墳周濠出土遺物観察表

掘図番	レイア	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考	取り上げNo.
			部位	法量（cm）			外器面	内器面	外器面	内器面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
				口径	底径	器高													
号	9	円筒埴輪	口縁	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	横方向ナデ	ナデ，指オサエ	◎	○	○			赤色石	良	内器面に接合痕残る。	一般 A
	ウ 10	円筒埴輪	口縁	－	－	－	橙	浅黄橙	指オサエ後工具横ナデ	縦方向工具ナデ後横方向工具ナデ	○	◎				褐色石	良		一般 A
14	11	円筒埴輪	口縁	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	◎	○	△			褐色石	良		4-3T (6T)
	ト 12	円筒埴輪	口縁～胴	27.4	－	－	にぶい橙	にぶい橙	口縁部：横方向ナデ，胴部：縦方向ヘラ状工具ナデ	ナデ	◎	◎				灰色石 赤色石	良		
	13	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	斜め，横方向工具ナデ	横，斜め方向指ナデ	◎	◎	◎				良	断面台形の突帯文。	4-2T (5T)
	鳥	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	横方向工具ナデ	ナデ	◎	○					良	断面台形の突帯文。	一般 A
	15	円筒埴輪	胴	－	－	－	橙	橙	ナデ	指オサエ，ナデ	○	◎	○			灰色石	良	断面台形の突帯文。	1-1T (8T)
15	16	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ，突帯部横方向ナデ	指ナデ	◎	◎	○			赤色石	良	スカシ孔あり。断面台形の突帯文。	
	17	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい橙	縦方向ハケメ後ナデ，突帯部以下ナデ	斜め方向板状工具ナデ	○	○	△			灰色石 赤色石	良	断面台形の突帯文。	一般 A
	18	円筒埴輪	胴	－	－	－	浅黄橙	浅黄橙	指オサエ，横方向ナデ	板状工具による縦方向のナデ	○	◎	○				良	断面台形の突帯文と思われる。	一括
	19	円筒埴輪	胴	－	－	－	橙	橙	横方向ナデ	斜め方向板状工具ナデ	◎	○	○			褐色石 灰色石	良	断面平偏台形の突帯文の接合面に回線見られる。	5-1T (3T)
	20	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	浅黄橙	突帯部：横方向ナデ，突帯部下：ナデ	指オサエ，ナデ	○	◎	○			褐色石 灰色石	良	突帯は偏平な粘土帯を2重に重ねて貼りつける。横ナデにより断面M字形を呈す。スカシ孔あり。	
16	21	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	橙	突帯文：横方向ナデ突帯文以下：ナデ	指オサエ，ナデ	○	◎	△			赤褐色石	良	偏平な粘土帯を付して突帯文をなす。突帯の下部は完全に接着させていない。	一般 A
	22	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	突帯部：横方向ナデ，突帯部下：縦方向工具ナデ	ナデ	◎	◎	△			褐色石 灰色石	良	突帯文は断面三角形。突帯上面は横ナデによる稜線が生じる。	
	23	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい橙	突帯文より上：縦方向ハケメ後ナデ，突帯文から下：横方向工具ナデ	斜め横方向ヘラ状工具ナデ	◎	○	◎				良	断面三角形突帯。突帯下部は偏平の粘土を貼りつけている。	4-2T (5T)

16	24	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	斜め縦方向ナデ。突帯部：横方向ナデ	指ナデ	○	○	○			軽石 褐色石	良	突帯先端は指オサエ調整後，突帯付け根は横方向ナデで仕上げる。	
17	25	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	斜め方向板状工具ナデ	◎	○	○				良	刻線文あり。	
	26	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	上縦方向，横方向工具ナデ	ナデ	◎	◎	○				良	断面扁平コ字形の突帯。刻線の綾杉文。	
	27	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	◎	○				良	断面半円形突帯。突帯文下部に２条の刻線による山形文。２条の弧状文，その中に直交する刻線文。	
	28	不明	不明	－	－	－	橙	橙	ナデ	工具によるナデ	◎	○	△			褐色石	良	小片のため，器種不明。山形または，菱形の刻線文。	4-3T (6T)
	29	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	灰色	ナデ（一部縦方向ハケメ残る）	工具ナデ	◎	○				褐色石	良	柳葉鎌形の刻線文。	
	30	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	板状工具ナデ	ナデ，ほぼ摩滅	○	○	○				良	主頭鎌形の刻線文。スカシ孔２箇所あり。	
18	31	円筒埴輪	胴	－	－	－	明赤褐	にぶい橙	縦方向ハケメ・板状工具ナデ	横方向の指ナデ，オサエ	○	◎				灰白色石	良		2AT (4T)
	32	円筒埴輪	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	横方向ナデ	横方向ヘラ状工具ナデ	◎	○	○			赤色石	良	突帯部剥離。接合面に２条の凹線。	一般A
19	33	円筒埴輪	胴～底	－	32.0	－	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ヘラ状工具ナデ後ナデ 底部：板状工具ナデ	○	○	△			軽石	良	上部にスカシ孔あり。扁平コ字形突帯。	
	34	円筒埴輪	胴～底	－	－	－	浅黄橙	にぶい黄橙	縦方向ヘラ状工具ナデ	胴部：斜め方向板状工具ナデ，底部：指オサエ	◎	◎	△				良	底面に粘土板接合痕あり。	4-3T (6T)
20	35	円筒埴輪	底	－	－	－	にぶい褐	灰褐	縦方向板状工具ナデ	板状工具ナデ後指ナデ	◎	◎	○			赤色石	良	底面に粘土板接合痕あり。	4-3T (7T)
	36	円筒埴輪	底	－	－	－	橙	にぶい褐	横方向板状工具ナデ。底面：ヘラ状工具による刺突痕または粘土板の接合部。	横方向工具ナデ	◎	○	○			軽石 灰色石	良	底面に粘土板接合痕あり。	4-2T (5T)
	37	円筒埴輪	底	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ヘラ工具ナデ後，指オサエ，ナデ	◎	◎	△			褐色石 白色石	良		4-2T (5T)
	38	円筒埴輪	底？	－	－	－	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	指オサエ，工具ナデ	◎	◎	△				良	ヘラ状工具による菱形文	4-3T (6T)
21	39	器財埴輪	不明	－	－	－	にぶい橙	浅黄橙	不明（表面に小さい孔が顕著）	指オサエ	◎	◎	○				良	ヘラ描きによる綾杉文	
	40	器財埴輪	不明	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	指オサエ，ナデ。幅２cmほどの粘土帯を重ねている。内器面は接合部残る。	◎	◎	○			褐色石	良	1.6 ～ 1.7cm 幅で横方向のヘラ描きの直線後，綾杉文，鋸歯文をヘラで施す。	
	41	不明	胴	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ヘラ状工具ナデ，指ナデ，指オサエ	◎	◎	○			褐色石	良	全体的に内湾している。ヘラ描きによる綾杉文。	一括

第６章　総括

第１節　栗之峰Ｂ遺跡発掘調査のまとめ

（１）溝跡の概要

本発掘調査では，鹿児島大学埋蔵文化財調査センターによる地中レーダー探査調査をもとに，確認調査を実施した。確認調査の結果は，第７図のとおり２条の溝跡を検出するに至った。古墳に起因する周濠とも考えられたが，遺構の構造・埋没状況や出土遺物の様相から，古墳時代の遺構と断定するには困難であった。この溝跡の時期は，おそらく中世ないし中世以前に造成された溝跡と思われ，近隣に中世の遺跡が存在している点も考慮しておきたい。

（２）古写真からみえる栗之峰Ｂ遺跡

第22図は，昭和28年４月に米軍によって撮影された航空写真である。横瀬古墳と栗之峰Ｂ遺跡を中心にトリミングしたもので，昭和30年代に行われた農業基盤整備事業以前の地形を表している。

この古写真をみるに，今回実施した調査範囲に古墳らしき丘や影がみえる。また影の部分は，地形の高低差を表している。そのため，丘の東側にみえる影は，垂直な地形の高低差があったことが伺える。なお，地元の方から，丘の上に祠を造って祀っていたとの証言がある。このことから丘自体の存在は確かなものであり，地元住民から認知されていた。

（３）総括

古写真に写る丘を発端に，古墳が存在する可能性を確かめるため調査を行ったが，古墳を確証付ける遺物・遺構の発見には至らなかった。ただし，中世の溝跡が検出された意義は大きい。近隣には中世の遺跡や中世城跡も築城されているため，古墳時代以降から現代まで脈々と歴史が繋がっている地域であることが伺える。

第22図　昭和28年の栗之峰Ｂ遺跡周辺地形（昭和28年４月米軍撮影）

第２節　飯隈遺跡群発掘調査のまとめ

（１）　飯隈遺跡群内鷲塚地区調査状況

飯隈遺跡群内にある鷲塚地区では，平成 22・23 年に実施した確認調査から現在に至るまで計 24 基の地下式横穴墓が確認されている。また，戦後の圃場整備事業において耕作地が陥没し，数基地下式横穴墓の発掘調査が行われた記録は残っているが，調査の実施場所や基数は不明である。

確認されている 24 基の地下式横穴墓のうち，今回の発掘調査分を含めて計７基完掘している。完掘した地下式横穴墓の詳細は第４表のとおりである。

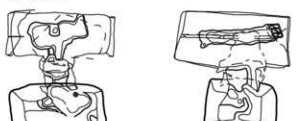
（２）　17 号地下式横穴墓のまとめ

17 号地下式横穴墓（以下 17 号という。）のまとめを行うにあたり，今回の発掘調査では過去の調査より留意すべき点がある。それは，古墳（円墳）のある丘陵地の裾に 17 号が造成されていることである。17 号以前の調査を実施した地下式横穴墓は，古墳から離れた場所にあり，古墳との関連性をみるにはやや弱いものがあった。17 号は今までの調査箇所より古墳に近接されているため，古墳との関連性を期待するところであった。結論からいうと，今まで調査した地下式横穴墓の中で一番規模が小さく，人骨・副葬品ともに検出するに至らなかった。玄室の規模から，成人の墓ではなく子供の墓であった思われる。古墳の埋葬者との血縁関係を指摘されるが，古墳との距離関係で地下式横穴墓の規模や内容に優劣がみられない可能性がある。

（３）　総括

17 号の構造について，玄室構造（平入り）だけを抽出し，飯隈遺跡群内で実施した過去の調査事例と比較した。玄室の天井は，ドーム型というより家型を模して 17 号は造成されたと思われる。竪坑の形状は，やや玄室に対して横長であり，他の地下式横穴墓より極端に小さい事はなく，22 号より大きくもみえる。

17 号の調査成果から，現時点の飯隈遺跡群内における地下式横穴墓を考察するに，成人だけでなく子供用の地下式横穴墓も共存し，平入りがやや丁寧な造成がみられる。ただし竪坑と玄室の規格は必ずしも連動しない点もあげられる。今後は，飯隈遺跡群だけでなく大崎町内で調査している地下式横穴墓の比較も検討していきたい。



第 23 図　地下式横穴墓平面比較図

第４表　飯隈遺跡群内鷲塚地区地下式横穴墓調査成果

調査年度	遺構番号	玄室構造 屋根の型	玄室内副葬品	人骨	性別（年齢）
平成 27 年度	１号	妻入り 扁平型	刀子１点	１体有り	女性（壮年後期）
	20 号	妻入り 扁平型	刀子１点 貝釧２点（オオツタノハ製）	無し ※ただし全身が粉状で確認。	不明
	21 号	平入り 家型	無し	２体有り	１体目：女性（熟年） ２体目：女性？（成人）
	22 号	平入り 家型	鉄剣１点	１体有り	男性・熟年
	23 号	平入り ドーム型	鉄刀１点　鉄剣１点 鉄鏃１点　刀子１点	１体有り	女性（壮年）
平成 28 年度	24 号	妻入り ドーム型	鉄刀１点　鉄鏃５点 刀子１点	１体有り	女性（壮年後期）
平成 30 年度	17 号	平入り 台形型	無し	無し	不明

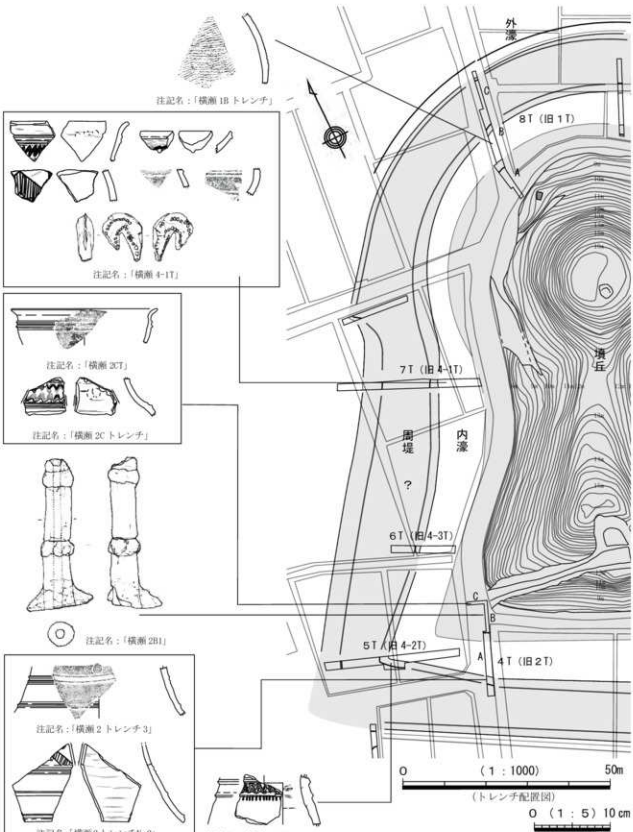
第 24 図　飯隈遺跡群鷺塚地区地下式横穴墓位置図

第３節　横瀬古墳周濠出土遺物のまとめ

（１）埴輪のまとめ

横瀬古墳出土遺物は大部分は円筒埴輪の埴輪片である。出土地点または採取地が詳細でないものが多いが，トレンチごとで袋詰めされているものから判断すると，出土遺物は４Ｔ～８Ｔ内のものが多い。

少数ではあるが，円筒埴輪でない器財埴輪と思われる埴輪片も数点確認できる。本報告書第５章第３節で報告した器財埴輪については，出土地点に関する情報は無い。



第 25 図　昭和 52・53 年確認調査における須恵器等出土概要図

『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和58年度－』（鹿児島県教育委員会 1984）で掲載されている遺物の中で，形象埴輪の一部と推測されているものがある。威儀具などの器物を表した埴輪の脚部のように思われる。これは，遺物の注記を観察すると『横瀬2B1』と書かれている。少なくとも旧トレンチ名で2トレンチB区で出土したものと想像できる（第25図）。その場合，この形象埴輪は前方部西側コーナーで出土したものとなるのだが，2トレンチB区は削平された現道路の部分にあたるため，流れ込んだ遺物の可能性もある。なお出土地点及び状況の詳細記録は無い。

円筒埴輪については，突帯部のあるものを選び出した。紙面の都合で，すべての突帯部分を報告することはできなかったが，突帯の断面形が台形である場合が多い。その他のものとして，板状の細長い粘土帯を貼り付けるものもある。この場合，断面形は扁平なコの字もしくはM字形である。M字形は突帯の平坦面をナデ調整する際に平坦面が浅く凹んだことによるものである。

また，断面形が三角形を呈するものもある。この場合は，突帯の接着部に対するナデ調整と，突帯先端部に対するナデ調整と2段階で整形をしているようである。先端部に対するナデ調整は，明らかに突帯先端に鋭い稜を作るためのもので，突帯先端を上下つまむようにして横方向ににナデ調整を施したものであろう。中にナデ調整ではなく指オサエで調整しているものがある。先端の調整後に突帯の接着部を仕上げている傾向がある。

突帯の断面形が台形のものと，三角形のものは同一個体において見られるものもあり，下部の突帯は断面三角形，上部の突帯が断面台形となっているケースもある。なお，突帯が剥離してしまっている接着面にも注目をしてみると，32のように接着面に浅い凹線が確認されるものもあった。これは突帯を貼り付ける前の割り付け痕と推測されている（橋本 2011）。

今回は文様が施されている埴輪片も掲載した。「ヘラ描き」による施文であるが，施文の方法としては，a．幅のあるヘラ状工具を押し当てて施文するパターン，b．あまり原体幅の無いヘラ状工具，もしくは尖った棒状の工具を押し引いて施文するパターンが想定された。

aの場合，直線の中央部は溝が深く刻まれ，両端部にかけて溝の深さが浅くなる。押し当てるヘラ状の工具先は，弧状を呈していると推測する。aでは直線に「ブレ」が生じない。bの場合，直線溝の一端は深く，もう一端の方向に浅くなる。つまり，「払う」ような工具使いをしている。また直線を描くにあたり「ブレ」が生じるため，わずかな曲線がある。

文様は，今回報告したものでは，綾杉文が多く見受けられたが，円筒埴輪だけでなく，器財埴輪によく見られた。また綾杉文と鋸歯文を組み合わせたものもある。その他に，鉄鏃を表現したと考えられる文様もあった。そのほか断片であるため，文様の全体像が推測できない25や27のようなものもあるため，今後の類例を期待したい。

埴輪の調整は以前から指摘されているように外器面はナデによる仕上げがほとんどである。わずかにハケメ調整痕が残る場合もあった。また内器面もナデ調整がされており，工具，指を使ったナデ調整が認められた。内器面の調整は雑であり，粘土板，粘土紐の接合部を完全に消していなかったり，工具調整を行ったことにより凸凹が生じていたりなどが見受けられた。

（2）須恵器の出土範囲に関するまとめ

横瀬古墳出土の須恵器については，『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和58年度－』（鹿児島県教育委員会 1984）で報告されているものがすべてである。本報告書では，報告されている須恵器がどのトレンチで出土したのかをまとめた。それが第25図のとおりである。

墳丘西側のくびれ部分にあたる7Tで多く出土しており，もしトレンチの内濠部内で出土していたとすれば，墳丘くびれ部分に祭祀空間があったと推測できる。現在町道によって削平を受けて外観では判断しにくいが，墳丘東側のくびれ部分に対して，西側のくびれ部分はわずかに平坦面がある点で，造出しあるいはそれに類似する空間があった可能性もあり得る。

その他，前方部西側コーナーにあたる4T，5Tでも器台が出土している。ただ，そのうち2点はすでに墳体が削られている範囲で出土しているため，流れ込んだ可能性もある。しかし，それでも前方部西側コーナーに集中しているため，前方部西側周辺に祭祀空間が存在していた可能性は否めない。

【参考文献】
・大崎町教育委員会 2016『横瀬古墳』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
・鹿児島県教育委員会 1984『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和58年度－』鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（29）
・大西智和 2015「南九州の埴輪」『第30回国民文化祭かごしま2015シンポジウム　横瀬古墳とヤマト王権のつながり　～日本列島南端の海上交流の歴史～』第30回国民文化祭大崎町実行委員会
・橋本達也 2011「古墳時代鹿児島のやきものづくり」『やきものづくりの考古学－鹿児島の縄文土器から薩摩焼まで－』鹿児島大学総合研究博物館

図　　版

5トレンチ遺構検出状況（南東から）

1トレンチ北壁土層断面状況（南東から）

2トレンチ北壁土層断面状況（南東から）

5トレンチ遺構検出状況（南から）

4トレンチ北壁土層断面状況（南東から）

6トレンチ北壁土層断面状況（南東から）

6トレンチ北壁土層断面状況（南東から）

1

1

2

2

3

3

4

4

5

5

6

6

7

7

8

8

竪坑検出状況（北から）

玄室右側天井陥没状況（東から）

玄室左壁状況（西から）

羨門土層断面状況（東から）

完掘状況（北から）

竪坑完掘状況（北から）

9

9

11

11

10

10

12

13

13

12

14

14

16

15

15

16

17

17

18

18

19

19

23

23

22

22

20

20

21

21

24

24

25

25

26

26

27

27

28

28

29

29

31

31

30

30

32

32

34

34

34

33

33

35

35

35

37

37

37

36

36

36

38

38

39

39

40

40

41

41

大崎町教育委員会発掘調査報告書(12)

町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

栗之峰Ｂ遺跡・飯隈遺跡群・横瀬古墳

２０１９年３月

発　行　大崎町教育委員会
〒 899-7305　鹿児島県曽於郡大崎町假宿 1029 番地
印　刷　株式会社　新生社印刷
〒 893-0013　鹿児島県鹿屋市札元 1-22-34